頭書 古今和歌集遠鏡 下

特22
212

万葉にハ男女の相思ふとのみならず親子兄弟朋友の相思ふをよめるにもともに相思ふを題として部をなす

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十一

戀歌一

題しらず　よみ人しらず

時鳥なくやさつきのあやめ草あやめも知らぬ戀もする哉

ホトトギス　ヤウナワケナ物ヤラマダシラズニワシヤマア。ムチヤナ戀ナス

音にきくの白露よるハおきてひるハ思ひにあへず

一　素性法師

かへていへハ日にとりまして云ならん

○音ニキクバカリデ[の自慢]マダ見タコトモナイ人ヲ思フテ。夜ハヨキラレヲ　ハオキテ居テ。晝ハ又戀ノサハニエコタヘイフ。消サウニ思ハル、

紀貫之

上はは早くといはん序なり

音羽山ハ逢坂の西南につゞきて關より西は山科なり

よし野川岩浪たかくゆく水のはやくぞ人をおもひうめてし

○アノ人ヲオレヤトウカラサ思ヒソメタ。又オレガアノ人ヲ思フノハサイシヨカラモウ。吉野川ノ早瀬ノヤウニヤルセモナウ思フ。千秋云「後の歌の意は「たきつ心をせきかねつゝ」「たきつせの中にもよどはありてふをみゝなどの意なり。

藤原勝臣

志ら浪のあとなき方に行。舟も風ぞたよりのまゝるべなりける

○浪ノ上ノ。人ノトホツタ跡モナイ方ヘイク舟デモ。風ト云ツ物ガ手ヨリノ案内者ヂヤ。ソレニワシガ戀ハツンナ風ノヤウナ。タヨリニセウ物サヘナイワイノ。　餘材。打聞。ともにわろし。例をもてしるべし。

在原元方

音羽山おとに聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

立かへりとは涙によせていへり人に心をおとゝはその戀人の上に心をあひおくことなり

○音羽山ハ逢坂ノ關ノコナタニアル山ヂヤガ。其山ノ名ノトホリニコナタデ音ニハキヽナガラ。關ガアツテコエラレヂバ。コナタニナツト。トヤツテ居ルヤウニ逢坂ト云フ名ノヤウニ思フ人ニ逢フモエセズニ。何ン年モタテルコカナ。サテモ早ウ逢ヒタイ

立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつまら波

○此ヤウニヨソニハナレテ居テモ。心ハサヤウヂウ。カノ人ノ所ヘバカリイテ居レバ。つ白浪又シテモ〳〵アヽハレ逢タイコヤト思フ打聞いとわろし

つらゆき

世の中ハかくこそ有けれふく風のめに見ぬ人も戀しかりけり

ひをりの日とは騎射の日の事なり
あやなくはほわけもなく癸子もなしなど云におなじ

○ヨノ中ト云モノハマアカウシタフギヤワイ。マア聞テ下サレ。上マダ一目モ見タフモナイ人モ。此ノヤウニ戀シイギヤワイ

右近のうまばのひをりの日むかひにたてたりける車の下すだれより女のかほのほのかに見えけれどよみてつかはしける　在原なりひらの朝臣

ひをりといふ名ハ。袖中抄の說のごとくなるべし

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくハあやなくけふやながめくらさん

○見ヌデモナシ見タデモナイ人ガ此ヤウニ戀シイギヤガコレデハワケモナイフニ今日ハ一日シンキニ思フテクラスデアラウス

よみ人しらず

ゆくるしらぬ何かあやなく分ていはん思ひのみこころ去る

春日野ノ祭ハ延喜式に春二月冬十二月共に上ノ申ノ日祭レ是とあり
上の句は序なり

べなりけれ

○見タノ見ヌノト人カラハ何ンノイワウフグ。ソレヤワケモナイフギヤ。戀ト云モノハ。思ヒバッカリコソハ。イツデハアハレルシルヘナレ。其外ノフハナニモドウコウト云フハナイワイナ

かすがのまつりよまかれりける時に物見よ出たりける女のもとに家をたづねてつゝはしける　みぶのたゞみね

春日野の雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君ハも

○春日野ノ雪ノアヒダカラ。ハエデトクル草ノチットバカリ見エツメタヤウニハッ〳〵ニチョット見エタ御方ワイノマア

人の花つみしける所にまかりてうこなりける人のもとに後によみてつかはしける

はなつみの事はるの巻にいへりこの山さくらをたとへいふとさなくともあるべけれど飼碧に花つみしけるとあるにかすみの間よりなど云おもしろくつゞきたり

山櫻かすみのまよりほのかよも見てし人こそ戀しかりけれ　つらゆき

○山ノ櫻ノ花ヲ。霞ノアヒダカラ見ルヤウニ。ウス〳〵ト見タ人ガヤ
アサテ〳〵戀シイヿヂヤワイ

題しらず　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきハ心ハ人につくるなりけり

○何ンゾノタヨリニコソ。物ハコトヅケテヤルモノナ。レタヨリテモナイ。此ワシガ思ヒノ。カハツタコトハ。此ヤウニ思フ心ヲソノ人ニツケルノヂヤワイカウイフノハ。タヨリニ物ヲコトヅケルト。心ヲ人ニツケルト云ト詞ガ同シヿヂヤニヨツテヲ餘材わろし。打聞いかゝる意をも聞とりがたし

はるかになりとうけたる飼にあらずはるかに開つゝにてあひなんとはくもゐの如くはるかにしていつもしらぬとなりさてその人の名は高く音にきゝつゝ戀われたるとなり

はつ雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をおもふかな　凡河内躬恒

○空ヲ飛デイク始メテノ雁ノ聲ヲ聞クヤウニ。人ノ聲ヲハツ〳〵ニチヨツト聞テカラ。心ガヒタスラ。ウテウテンニナツテ。サテモ〳〵モノ思ヒヲスルヿカナ

あふぞハ雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝこひわたるかな　つらゆき

○コレホド戀シウ思ウケレド。ナガ〳〵逢ハレサウナ。モヤウハ遠イヿデ。タヾ雲ノ中デ鳴ルカミナリノ遠イ音ヲヨソカラ聞クヤウニ。音ニバツカリ聞テ月日ヲタテルヿカナ　よみ人しらず

新撰和歌集には初の句夕されば奥義抄袖中抄には末の句人戀る身は

かた糸をこなたかなたよりかけて逢ずハ何を玉のをにせん

○一筋ヅヽノ糸ヲ。合セテ玉ヲツナグ緒ニヨラウト思ウテ。ソノ糸ヲアチラヘコチラヘトヨリカケテ。モシツレガ一ッニ合ハイデ。緒ニナラズハ。玉ツナグ緒ニハ何ヲセウゾ。ワシガ戀モテウドソヽナ物デ此ヤウニイロ〳〵トスレドモシシドウ逢ハレズバドウシテ。命ガツヾカウゾ餘材打聞ともに。二の句の注わろし。これはたゞさま〳〵として心をつくすとをたとへるなり。男女のこなたかなたをたとへたるにはあらず。

夕ぐれハ雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人をこふとて

○ユウカタニハ雲ノ手旗ト云テイロ〳〵ノ雲ガタツ物ヂヤガテウドソノ雲ノタツ空ノヤウニ何ソノ手ガヽリモナイ。遠イ人ヲ思フトテワシハユフカタニナレバ。ソノ雲ノハタテツヤウニイロ〳〵サマ〳〵トッ物思ヒヲシマスル

かりこもの思ひみだれてわがこゝろ妹ぞ恋るらめや人しつげすば

○苅タマコモノミダレルヤウニワシハイロ〳〵ト心ガミダレテ。此ノヤウニ思フト云フナ。妹ハ知ラウカイ。人カイツテキガサズバ。コレホドニ思フトハ知ラハスマイ

つれもなき人をやねたく白露のおくとハなげきぬとハ志のばん

○三オキルト云テハナゲキ。チルト云テハシタウテ。アノアイソモナイ氣ヅヨイ人ヲ此ノヤウニ思ハウカヤ。サテモクチヲシイコヤドウゾ思フマイゾ

ちはやぶるかものやしろのゆふだすき一日も君をかけ

おゝとは、起るとてはなりぬとはる解るとてはなり

ゆふたすきは木綿を

たすきにするを云歟官等がつねにするとなればかけぬ＝はなしといはん序にいへりかくるは心にかくるなり

ぬ日はなし

○因ワシハ一日モオマヘノコトヲ云ダシテ思ハヌ日ト云ハナイ

我戀ハむなしき空にみちぬらし思ひやれども行方もなし

○ワシガ戀ハ。サテケシカラヌ戀デ。虛空ヘ一ツパイニフサガツタサウナリウヂヤカシテ。思ヒチハラシテヤラウト思ヘド。ドツコヘモ行ケコロガナウテ。ナンボウデモ此思ヒガハレテ。ユカヌするがなるたごのうら浪たゝぬ日いあれども君をこひぬ日はなし

○此ノタゴノ浦ノ浪ハ。オホカタイツデモ立ツカ。ソレデモタマ〳〵ニハ此浪デモタヽヌ日ハアレドモ。ワシガオマヘヲ戀シウ思ハヌ日ト云テハケガナ一日モナイ

夕づくよさすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もする哉

アレアノ夕日ノ影ノサヌス。岡ノ松葉ハ四季トモニ同シ色デ。イツモ云ワカヲモナイガ。テウドソノヤウニワシハ。イツト云。ワカヲモナイ戀ヲチマアスルヲカナ。サヲモ〳〵。千秋云。此初句ノタヅ〳〵よ。タヅ〳〵ひ昔より兩本有しと見ゆ。千五百番ノ歌合に。公經卿さびしさをいかにとハましタヅ〳〵日さすや岡べのまつの雪折季經判に。いハく。万葉集にハゆふづくひさすやと待り 古今の歌を思ひて 松をよまば タヅ〳〵よとが侍るべき云〻 かゝれば公經卿ハタヅ〳〵日とある本によりてよまれ。季經卿ハタヅ〳〵よとある本につきて判せられたるなり。今師も 譯ハ日とある本によられたり 打聞に。松を待に。とりあしてとあるはわろし。そのこゝろはあし

清

あしひきの山下水ゐこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○山ノ陰ナ川ハシゲツタ木ノ下ニカクレテ。ヨソヘ見エハセヲ氏。ゲウサンニサツサト流レオチルモノヂヤガ。ワシガ戀モテウドソノヤウデ。見エヌヤウニカクシテハ居ルケレド。雪ノ内サツサト瀧入流レルヤウデ。ソレヲセキトメウト思ヘド。中〳〵セキトメラルヽコデハナイ

此歌後撰には女のもとにつかはしけるよしのふ朝臣とありてかへしよみ人しらず木がくれてたぎつ山水いづれかはめよしも見ゆるしるにこそきけと見へたり

よしの川いはきりとほし行水の音にハたてじ戀ハしぬ
ども

○吉野川ハケシカラヌ早イ川デ。ドウ〳〵ト鳴ッテ。岩ヲ切リトホシテイクヤウニスルドイ流レヂヤガ。ワシガ戀モ。ムチノ内ハ吉野川ヂヤツレデモタトヒコレデ。死ニハヌルト云テモ。吉野川ノヤウニ。音ニタテ、人ニハシラレマイヅ。

たぎつせの中にも淀ハ ありてふをなど我戀ハふちせと
もなき

○山川ハ早イ物ナレド。ソレデモ其ノ間ニハ。淵ガアッテヨドム所モアルト云フヂヤニ。ワシガ戀ハナゼ淵ヂヤ瀬ヂヤト云ワカチモナシニイッモ早瀬ノヤウナフヂイ

山高み下ゆく水の去たにのみ流れてこひん戀ハ去ぬと
も

○山ガ高サニ。上ノ方ヲバイカズニ下ノ谷バッカリ流レル水ノトホリニワシモタトヒ此ノ今デコヒシニ。死ヌルト云テモ。ウハベノアラハシハスマイヅイッマデモ心ノ内デバッカリ思ウテ居ヨウヅ

思ひいづるときハの山のいはつゝじいはねばこうあれ
戀しきものを

○の山乃三口ヘダシテイハヌデコソアレ思ヒダシタキニハソレハ〳〵戀シイモノヂ

人去れず思へぼくるしくれなゐの末つむ花の色にいで
なむ

○人ニシラサズニ心ノ内デバッカリ思フテ居レバキッウシユッナイ。コレデハドウモタマラヌホドニ圖イッツウナダシテノケウ

秋の野の尾花にまじり咲花のいろよやこひんあふよし
もなし

水による戀の類なりこれより下この巻の中にしのぶ心をよめるは戀る人ひとりにいはじとしのぶなり後のまきなるは世の人にしのぶなりと

紅の花は末よりさき初るを摘とる故に末つむ花と思りと誰もとわれど思ふにたゞ輪の末少づゝ咲たるを摘ものなればみるべし万葉によりにのみ見つつやこひん紅の末つむ花のかたにいづくもとありこれを少しかへしのみ

ある人云山高み下行水とはふかく思ふたとへなり以上四ツは

はつえハ上枝をしつえ下ハ枝を云日本紀應仁天皇の御歌にかくハし花搦しつハ人みなとりはつえハ島わからしとよめり

○此ヤウニ心ノウチデバッカリ思フテ居テハ。トテモドウシテモカウシテモ逢ヘレサウナ。モヤウガナサニ。シアンシテ見レバ因イッソウチダシテカヽラウカイ。清

上句打聞の説よろし

わがうの丶梅のほつえにうぐひすの音に鳴ぬべき戀もする哉

○アサコチノ庭ノ梅ノ木ノ高イ枝デ鶯ガナクカ。ワシモアノヤウニ聲ヲアゲテナキモセウヤウニ思ハルホドノ戀ヲマアスルアフレモナイフカナ

あし引の山ほと丶ぎすわがことや君よこひつ丶いねがてにする

○夜ルモヨヒトヨヲヲレヌニヨッテ聞テ居レバ。ヒタモノ郭公ガ。鳴ガアレモソレガ君ヲ思フヤウニ。戀ヲシテヲラレヌコトカイ。三四の句は。わが君に戀ることや。こひつ丶といふ意なり。

夏なれば、夏されば を略りしかまた六帖に見くればとありしかにもあらんか

みるきハ身そゝぎといふ義なり祓せんとてまづ身をばそそぎ清むるなりより身禊と除際ハ二つのとなるを後にハみそぎとのみもはらひの事をいへり

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我身下もにせん

○夏デイハウナラ。チウド家ノマヘデタク蚊遣火ノ上ヘアラハレテハモエズニイッマデモクス〳〵トフスボッテアルヤウニ。ワシガ身モ此ノヤウニイッマデ人ニハイハズニ胸ヲモヤシテ居ルデアラウ

夏なれば、夏の物にてたとへていはゝといはんがごとし秋なればもあるそれも同じ意なり

戀せじとみたらし河にせしみそぎ神ハうけずぞなりにけらしも

○ドウゾ戀ヲスマイト思テ。御手洗川デシタミッギヲ。神ハトウ〳〵御ウケナサレヌサウナウイマア。清サウカシテヲカラ戀ガヤマヌ

あはれてふをだよなくハなにをかも戀のみだれのつかねをにせん

○思ヒガ胸ニ一ツ杯ニナルトキコハ。聲ヲアケテ。アヽアハレアヽアハレトイヘバコソスコシハ胸モユルマレ。ソノアヽアハレト云フサヘナクバ。戀スルモノハ何ンデ心ヲサメウゾ。テウド萱キルヲ苅テ亂レタ時ニ。一トコロヘトリアツメテ。緒デユヒツカヲルヤウニ。戀テ心ガ亂レタ時ニハアヽアハレ〳〵ト云ノカ束ヲ緒ヂヤ

思ふよハ志のぶるとぞまけよける色にハ出じと思ひじ物を

○ナンボシノンデ見テモ。思ウ方ガツヨイニヨツテトウ〳〵シノブ方ガヤマケタワイ。イツマデモ色ニハダスマイト思ウタモノヲ

我戀ハ人志るらめや志きたへの枕のみこそ志るはしるらめ

○此ノ通リニキツウシノベバ。ワシガ戀スルノハ。人ガシラウカヤ。タレモ知ル人ハアルマイ枕バツカリコソハ。夜ル〳〵シテヲルモノナレバ。

あさじよ淺草生は小野といはん冠辭なりしのぶといはんとてしのハらと云

モシ知ルナラシリモセウケレ

淺茅生のをの〳〵志のいらぶとも人志るるれめやいふ人をしる

○㊀㊁此ヤウニ忍デ思フト云フモ君ハ知ウカイシリハスマイ云。テキカス人ナシニハ

人志れぬ思ひやなぞとあしがきのまぢかけれども逢よしもなき

○人ニシラサヌコノ思ヒトシタフワイノ㊂マヂカイ所ヂヤケレドモ。なぞと　ナゼニ五アハレルモヤウノナイフゾ。千秋云。二の句なぞとのどもじ。歌注打聞などに。たゞなぞなり。といふ辭ハ。いはれぬやらなれどもとバのたすけにおきたるなり。とあるハ心得ず。助辭ハとも じを用ひたると。をさ〳〵見へず此といかならず。もを寫し誤りて傳へたるにて。もといなぞもよてゞ有けん。なぞもハ古歌ハ例多く見ゆちかく

これは女の歌なるべし

いでは日本紀に厭乞と書萬葉にも乞の字のみをかけり

は此巻の中よりもかゝり火よ云々なゝもかくとありもと。と字の形よく似たり

思ふともこふともあいん物なれやゆふてもたゆくとくる下ひも

○イカホド思フタト云テモコトシタウタト云テモ逢ハレウモノカイドウデアハレルヿデハナイ。ソレニ又シテモ〳〵。ムスブ手モタルイホドセツ〳〵下紐ガトケル。惣体シキリニ人ニ逢ヒタウ思フ時ニハ下紐ガトケルモノヂヤト云フヿヂヤガ。ワシハナニホドアヒタウ思フテ下紐ガトケタト云テトテモ逢レハセヂハ。何ノセンナイフヿヂヤニ。打聞下何の説上句にかけ合わろし

いで我を人をとがめぞ大ぶねのゆたのたゆたに物おもふころぞ

○イヤサ。コレ貴様タチノヤウニトガメテ下サルナイ。ワシハ大キナ

和名抄芝子ウケさよめりうけハ水にたゞよひてところさだめぬもの故にたといへり

打はへて打のべてといはんがごとしさてくりよする物故にくろしといはんとて上にいへるなり

舟ノ涙ニユラレルヤウニ物思ヒテウカラ〳〵トシテ居ルヲセウヂヤスレヤアヂナ顔ツキニ見エルハズヂヤ

いせの海に釣するあまのうけなれや心ひとつをさだめかねつる

○戀ヲスルワシガ物心ハイセノ海デ獵師ノ釣ヲスルウケヂヤカシテ。フハ〳〵トウカレテシヅメウト思フテモドウモシヅメラレヌ。釣ノウケト云フモノハ涙ニユラレテ。フハラ〳〵トウキアルク物ヂヤガ心ガテウドソノヤウコサ

いせの海のあまの釣縄うちはへてくるしとのみや思ひ渡らん

○一二戀ユエニ長イ月日ヲ。此ヤウニシユツナイフヤトバッカリ思フテタヲルヿデアラウカ。　千秋云。あまのつりなはうちはへてくるとつゞけたるは。いと〳〵長き縄に釣の枝糸をあまたつけて。海の中へ。

なみだ川いせに在といへど地名にあらず

遠くうちはへおきて。その繩をくりよせあげて。かの釣をくひたる魚どもをとるわざあり。これなり。今世よこれをながのゝ釣といふゝ。長繩の釣といへるを訛れるなり國よりていゝ。ながないともいへり。この歌うちゝへて。くるといへるよのつねの釣よては。かなはぬとなり

涙川あよとなかとをたづねけん物おもふときの我身なりけり

○涙川ト云川ノミナカミハトコヂヤカトナゼ思フタヲヤラツノ川ノミナカミハドコデモナイ物ヲ思フキノ此ワシガ殘身ヂヤワイ。ハテ涙ハ身ヲ出ルハサテ

たねしあれば岩ふも松ゝおひよけりと戀しとひゝあゝざらめやゝ

○タヲヤガアレバ。岩ゝモ松ハヘルワイ。スレヤナンボ出來ニクイ戀ヂヤトテ云モ隨分骨ヲ折ッサヘシタナラ。逢ハレヌト云フガアロカイ。ドコ

空にうきてさいはんとて上はおきたり

ねをのみなくといふに上はいひ出でたれど鴨にゝみたるといふ詞あるによりよめるなり

よひしは毎晩のことなり新撰和歌集にハこゾデハアハレヌト云フハアルマイ

あさなゝたつ朝霧の空よのみうきて思ひ集める世なりけり

○毎朝タツ川ノ霧ノ中ニウイテアルヤウニイツモ落ヲ付カヌ思ヒノアル世デヤワイ

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく

○ワスレラレル時ガナケレバ。三イロ〳〵ト思ウテ泣テハッカリヲ居ルワシヤ

から衣ひも夕ぐれにある時ゝかへすゞも人ゝとひしき、

○三ひも毎日ユフ方ニナレバカヘスゝモサカノ人ガ戀シイ

よひゝに枕さだめんかたもなしいかよねし夜か夢に

ひしてとあり

萬葉に未〻死なばやすけん出る日の入わきしらぬわれしくも是なおもひ女と知るべし

見へけん

○イツヤ戀シイ人ヲ。夢ニ見タ丁早カツタガ其ノ夜ハドチラ枕ニドウシテ寐タ時デアツタヤラ。思ヒダシテ見レド覺エヌ。ソレデ此ゴロモ〻毎晩〻ドウゾ夢ニ見ヤウト思ヘド。ドチラ枕カヨカラウヤラ定メウヤウガナイ

餘材打聞ともよ上の句の說たがへりよく上下の詞を味ひて考るべし

戀しきに命をかふるものならばしにいやすくぞあるべかりける

○命ヲ此戀シサノクルシイノニカヘテ死ナル、モノナラ。死ヌルハヤスイ丁デサアラウト思ハレルワイ。此クルシイメチセウヨリ。死タ方ガハルカマシヂヤ

人の身もなともしものをあいずしていざ試こん戀やしぬると

○人ノ身ト云モノモ。ナンデモナラハシガラナモノヂヤ。戀シイ人ニアハズニ居テモソレガナラハシニナツタ。ソノ通リデ居ラル、モノカ。又ソレデハコタヘラレイデ。死ヌル物カ。ドレヤ。逢ノズニ居テタメシテ見ヤウヲ

志のぶれどくるしきものと人しれぬ思ふてふと誰に語らん

○思フ丁チ隱シテ居ルノハサテモ〻苦シイニ此ヤウニ人ニシラレズニ心デバツカリロフト云コトヲ。誰ニナリ𪜈語リタイモノヂヤ。ガタレニ語ラウゾ。タレコモ語ラウ人ガナイ

來ん世にもはやなりならんめのまへまつれなき人を昔と思へん

○イツソ早ウ來世ニナツテシマヘバヨイニ。ソシタラ此現在目ノマヘコツレナイ人ヲ昔ノ丁ヂヤ思ワウニ。昔ノ事ヂヤト思フタラ。コレホドニツクいせ物がたりにおもふといはでぞたゞにやみぬべきわれにひとしき人しなければといふうたを思ひあはすべし

なんバなりぬなごいふにおなじなかねをつゞめてなれと云

涅槃經に是身主常念々不性云〜如シレ畜レ水ヲ隨レ畜隨ヲ合フ

まどふハまよふにおなじ

ウハ思ハレマイワサ

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで思ふなりけり

○アイソモナイ人ヲ戀ヒフ思フトヲワシハマア。山ノ中ナラコダマノヒドケホドコサテモ〜大キナタメ息ヲツイテナゲイタカナ

行水にかぎかくよりもはかなきい思いぬ人をおもふなりけり

○流レライク水ヘ物ノ數ヲカキ。トメルノハギツキニ消テシマヘバ。ナンノナイラチノアカヌコギヤカ。ソレヨリマダキツイラチノアカヌコハ。コチヲ思ッテモクレヌ人ヲ。コチカラバッカリ思フノギヤワイ。ワシガ戀ハサウギヤワイノ

人を思ふ心い我にあらねばや身のまどふだよしられざるらん

唯集に誰がために君を戀らんてひわびて我ハわれにもあらぬなりけり

此我ハ家にもあちぞといふに同じ

○人ヲ戀シウ思フ心ハ。我心ギヤケレド。我心デハナイヤラシテ。此我身ノマヨウノサヘシレヌ。モシコノ心ガキット我心ニチガイナクバ。我身ノマヨフノガシレヌ〜トノコハナイハズギヤワサテ。アヽ戀ト云モノカハッタモノギヤ

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路はあふ人のあき

○人モナイハルカナ國ヘイタナラ道デ逢人モアルマイガ。テウドツンナモノデ。ワシガ戀シイ人思フチノヒヤル其心ノイク道モ。ダン〜遠ウナルカシラヌ。サウカシテ。アチコチト思フテ夢ヲ見テモ思フ人ニアフ夢ハ見ヌ。打聞上句の意たがへり

夢のうちに逢見んとを頼みつゝくらせるよひいねんかたもなし

○セメテハドウゾ夢ノウチニ逢ハウト思フテ。ヒルノ内カラソレヲ頼ミ

萬葉にこひしなばこひもしねとやたまほこの道行人にことつげん

シテ暮ラシタ夜ハ。ドチ枕ニドウ寢タナラ夢ニ見ラレウヅ。ドウ寢タモノデアラウヅトて心ガマヨウテ。ドウモ寢樣ガナイ。餘材打開ともよ。結句を解ねず。上なるいかよねし夜か夢よ見へけんといふ歌と合せて心得べし

こひしねとするわざならしうゞ玉のよるいすがらに夢よ見へつゝ

○コレハマア。戀デ死ンデシマヘト云フサウナ。ナマナカニ。夜ルハヨヒトヨ夢ニ見エテ。思ヒチサセテ。ホンマニハチカラアハレデサ

涙川まくら流るゝうきねよい夢もさだかよ見へすぞわりける

○涙ガ川ノヤウデ枕ガ流レテ川舟ノ中デ浮テ寢ルヤウナ。カウイウ浮寢デハ見ル夢モハッキリトハザ見エヌワイノ

戀すれゞわが身い影となりにけりさりとて人よそいぬもの故ハものながらの義なり

新撰萬葉にハ二三の句我身ぞかげとなりにけるとあり

下にもゆるは水そこをいひて心の中にもるなり心の中に思ふをにおもふと云ハあまたよめり

もゆる

○戀チスレバワガ身ハ。此ヤウニヤセテ。影ノヤウニナッタワイ。サウカト云テ思ウ人ニ添ヒモセヌモノトクセニサ。影ナラ人ニソヒソナモノザヤニ

かゞり火にありぬわが身用なぞもかく涙の川ようきてもゆらん

○鵜飼舟ノカゞリ火コッ川ニ浮テモエル物ナレ。カゞリ火デモナイワシガ身ノナセニマア。此ノヤウナ涙ノ川コウイテ。胸ニ思ヒノ火ガモエルヤジ

かゞり火よ影となる身のわびしきい流れて下よもゆるなりけり

○川ヲ流レテタダル鵜飼舟ノカゞリ火ノ移ッタ影ハ水ノ下デモエルノガ。ワシモテウドツンナモノデ戀ニヤッレテ影ノヤウニナッタ身ノ。

六帖にハ五の句うゑて見ましをとありて匡之の歌なり

ツヲイ難儀ナコトハ。長イ月日ヲ。心ノ内デバツカリ思フテ。ムチノモ

エルノヂヤワイ

はやき瀬ゝ見るめおひせば我袖の涙の川ゐうゑましを

のを

○ミルメト云モノハ海ノ中ヘハエルモノヂヤガ。ソレガ若シ川ノ早イ瀬ヘハエテソダツナラ。ワシガ袖ノ涙ノ川ヘウエウモノ。ナゼニナレヤワシガ涙ハ早イ瀬ノヤウニ流レルソシテ。戀シイ人ニ逢フコトヲミルメト云ニヨツテサ清

おきへゝよるもよらぬ玉藻の波のうへゝまどれてのゝや戀渡るらん

○ワシノ戀ハ沖ノ方ヘモ磯ハタヘモヨラズニ。涙ノ上デミダレテアル藻ノヤウニドナラヘモツカズニ心ガ乱レテ。イツデモ此ノヤウニ。戀シイ〳〵ト思フテバツカリ月日ヲタテルデアラウカ

打聞にハ人ハしらなんとあり

あしがものさわぐ入江のしら波のしらぎや人をかくこひんとゝ

○人ヲ今此ノヤウニ戀シウ思ワウトハ。思ヒモヨラヌコヒ人しれぬ思ひを常ゝするがゐるふじの山ころ我身なりけり

○常住人ニシラサヌ思ヒヲスルワシガ身ハ。外ニハナイ。駿河ノ富士ノ山ガサワシガ身ヂヤワイ。ナゼト云フニ富士ノ山モ火ハモエズニ常住烟ガ立テモエルハサテ

とぶ鳥のこゑも聞えぬおく山のふかき心を人ゝしらずや

○イカウ深イオク山デハ。鳥ノ聲モセヌモノヂヤガ。ソノクラヰノ奥山ホド深イ此ワシガ心ヲ。思フ人ハサウトハシラヌサウナガ。ドウゾ知テクレカシ

六帖にハトの向いハでしもこそこひしかりけれとあり

後撰にこの歌をのせて詞書に返しせぬ人につかハしけると見へてそのかへし

山彦のこゑのまに〳〵とひゆかバむおしきそらに行や

入紐ハ雌紐雄紐とて裝束の時とり合せてさし入るものなりよりて入紐と云ふ太刀にも入紐ありて片方を輪にしてそれへ入て結ぶなり

わふ坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しきねのゝ鳴らん

○相坂ニハトシテアルアノ木綿チッケタ雞モ人ガ戀シイヤラ。オレト同ジヤウニ聲ヲアゲテヒタスラ鳴。打聞ゆふつけ鳥の說わろし

逢坂の關ゐ流るゝいゝし水いはでこゝろゐおもひこすれ

○四イハズニ居ルデコッアレ。心ニハタイテイ思フフデハナイ

うき草のうへいしげれるふぢなれやふかき心をしる人のなき

○ワシノ深イ心底ハ。ウヘニハ浮草ノシゲッテ見エヌ淵ギヤカシテ。此深イ心底ヲ。人ガ知テクレヌ。フカイフガ見エヌサウナ

打わびてよバゝん聲ゝ山彦のとたへぬ山ゝあトじとぞ思ふ

○サシッマッテセンカタナサニ大キナ聲ヲシテヨバゝッタナラ。其聲ニハヨモヤ。コタマノヒビカヌ山ハアルマイトサ野フ。大キナ聲ヲノゝバ必コタマノヒビク通リデワシノコレホドニ深ウ思フフナレバアチラカラモスコシハ何ントヅ思フテクレッナモノギヤ

こゝろがへをる物ゝもがかた戀ゝくるしき物と人ゝしらせん

○タガヒニ人ノ心ガトリカヘラレル物ニシタイモノギヤ。ッシタラコチノ心トアチノ心ト入カヘテ片思ヒハクルシイモノギヤト云フヲアノ人ニ思ヒシラサウニ

よそゝしてこふれぱくるしい紐の同じ心ゝいざむすびてん

○今ノトホリニヘダッテヨッテ戀シウ思フテ居レバクルシイニ。兩方ノ紐ヲ一所ヘムスビ合スヤウニドレヤコレカヲハ一所ニ居ルヤウニセウ

ア。おなじこゝろよといへるい。或人ノ云からぶみよ同心結といふことあるよよれるなり。といへり。又今おもふよ。ところをこゝろと寫しあやまれるにや

春立ばきゆる氷の殘りなく君が心ハわれよとけなん

○春ニナレバ氷ノ殘ラズトケヌヤウニ君ガ心ハドウゾオクソコナウ我ニウチトケヨカシ

あけたてば蟬のをりゝへ鳴くらしよるゝ螢のもえとそ渡れ

○夜ノ明レバ晝ハ蟬ノヤウニヒガナ一日ナイテクラシ。夜ハ螢ノノウニ思ヒニモエテ夜ヲアカシテサ月日ヲタテルワイ

夏むしの身をいたづらになすとも ひとつ思ひよりてなりけり

○夏ノ比虫ノ火ノ中ヘトビコンデ。ツイ我身ヲムダニシテシマウノモ火なりはへハ打いへに同じはへハ經るなり日めもす夜もすがらの歎きを云なり

思ひを火にたとりなすも例のことなりよりて身のいたづらにと

チトラウト云フ思ヒ一ツニヨッテノフヂヤワイ。人ノ戀ヲスルノモテフド其通リデ。人ニ心ヲカケテ。ツイ我身ヲシモテノケルフヂヤアアゝ戀ハスマイフヂヤヤ

餘材打聞ともよひとつおもひの說わろし

夕ざれ清濁ばいとゞひがたきわが袖よ秋の露さへおきそいりつゝ

○戀チスレバタヾサヘ涙ガカワキニクイワシガ袖ヘユフカタニナレバ此ノ時節ノ露マデガオキソフテサ。イヨ〳〵カワカヌ

いつとても戀しかりけり清あゝねども秋の夕ゝあやしかりけり

○イツギヤト云テモコヒシウナイト云フハナケレドモ。ソノ内ニモトリワケテ秋ノ時分ノ夕方ハ又カクベツコドウモタヘラレヌワノ

秋の田のほゝとそ人をこひざらめ なぞか心よ忘れしも

いハへり飛蛾とも蜀蛾ともいふものなり

そハりハそふを延たる詞なり

此歌ハ小町集に入て下の句あやしかりけり秋の夕くれとみるたりあやしと云ハ常に異なるなり

せん

○□サウト顯ハレテ思フフリコツスマノケレ心ニハ何ンノ忘レウヅイハ

セヌ

秋の田のほのうへと照すいな妻の光のほのほも我やわする丶

○秋ノ田ノ稻ノ穗ノ上ヘイナヅマノピカリト光ルホドノチヨットノマモワシハオマヘノコヲ忘レルカイソレホドノ間モワスレハセヌアイワヤ

人めもる我かゝあやめ花を丶きなどかはゝ出て戀ぞしもあらん

○人目ヲハヾカル我身カノオレハ何ニモ人目ヲハヾカルコハナノニ。アウケモナノニアウケモナノナンノタメニ此ノウニアラハサズニハツカリ物フテ居ノウヅ

わわ雪のたまればかてゝくだけつゝわが物思ひのしげきころ哉

○淋雪ノタマルカト見レバ。エダマラズニクダケテ消ユルヤウニオレハ心ガクダケテ此コロハサテ〳〵モノ思ヒノシゲイコカナ

おく山のすがのねしのぎふる雪のけぬとかいはん戀のしげきゝ

○此ヤウニ思ヒガシゲウテハ。ドウモタマラヌニ□ワシハモウキユル死ヌルト云テヤラウカイ

淋雪ハあわしき雪といふことなり春にかぎらぞ冬にもよめりたまればかてにたまれば元拈すといふこゝろなり

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十一 終

いくはかなげによめるをよく味ひて歌の心をしるべし

うたゝ寐は惣寐なり俗にころび寐と云フ初てきはうめたりけりを約めていへるなり

頭書 古今和歌集遠鏡卷之第十二

戀歌二

題しらず　小野ノ小町

おもひつゝぬればや人の見えつらん夢とじりせばさめざらましを

○思ヒ〳〵寐ルユエニヤラ。戀シイ人ガ夢ニ見エタ。其時ニ夢ヂヤト知ッタラサマサズニオカウデアッタモノヲ。チシイヿヲシテサマシテノケタ

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき

○イッゾヤウタゝチシタ時ニ戀シイ人ヲ夢ニ見テカラ。夢ト云モノハヨイ物ヂヤト思ヒソメテ。ソレカラ又見ヤウ又見ヤウト思フテ。夢ヲ頼ミニシテ居ル

いとは茲の字にあたれりせめてはせまりてなり

万葉には袖かへすとあり「わさも子にてひてすべなみしろ妙の袖かへし志は夢に見るをや」

拾芥抄二士寺之中上出雲寺下出雲寺見にたり

法華經五百弟子品曰以無價寶珠繫其衣裏與之去云々この文講する時清行も小町もとも二座にありて聽聞しける故に是にとよせてよみて贈るなるべし

いとせめて戀しき時はうばたまのよるの衣をうらへしてぞきる

○衣ヲカヘシテ着テヲレバ思フ人ヲ夢ニ見ルモノデヤトイヘバワシモキツウサシツマツテ戀シウダヘラレヌ時ニハチマキヲウラカヘシテヲキテヲル

素性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼むくるゝ夜とよ

○ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレド秋風ガ身ニシンデ寒ケレバ日ガクレヽバ毎夜モシヒヨット見エルコモアラウカト思フテワシハツレヲ頼ミニヌル

しもついづもでらよ人のわざしける日じんせい法師のたうじにていへりけるとばを歌よよみて

をのゝあまちかもとよつかはしける　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬめの涙なりけり

○眞セイノ談義ニトカレタカノ法華經ノ衣裏寶珠ノ事ニツイテサ。ナンボ袖ヘツヽンデモ。タマラズニコボレテ出ル玉ハ戀シイ人ヲエ見ヌ目カラコボレル涙ヂヤワイ

ろへじ　こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我ハせきあへずたきつせなれば

○ワシガ涙ハ又ヽソンナコツヂヤナイトウモセキトメラレヌホド流レテ瀧ノ水ヂヤ。スレヤオマヘノソノ袖ニツヽンマヌ玉ト見エルクラサノ涙ハオロカナコイノ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

藤原ノとしゆきの朝臣

戀わびてうちぬる中に行りよふ夢のたゞぢは現ならなん

○思フテモ〳〵モアハレハセズ戀アグンデ。スコシチムツタ間ダニ通ウト見ル夢ノスグミチハドウゾホンマノコトデアレカシ。夢デコソズツト通ハレル直道ナレ。ホンマニハソンナコトハ及ビモナイコト。イツヽモ戀ワビテ居ル中ヂヤモノ。中は思ふ人との中あり。然るを餘材に。ねたる中ありと。いへるい。かあらず。もしからば。うちぬはぎにとそあるべけれ

すみのえの岸による波よるさへや夢の通路人めよぐらん

○畫ホンマニカヨフ道デハ人目ヲハバカルモ。ソノハズノコトヤガ。夜ル夢ニ通フト見ル道デマデ。人目ヲハヽカツテヨケルヤウニ見ルノハドウシタコトヂヤヤラ

これは波のよるを夜にいひかけて上は序なり万葉には曲道と書てよぎみちとよめり後撰にはこの詞をとりてすみのゑのきしのしらなみよるよるなど云たゞひのつゞきあまた見ゆたり

わが戀はみ山がくれの草なれや茂げさまされど出る人のなき

○ワシガ戀ハ。山ノオクニカクレテアル草ヂヤカシテ。段々トシゲサカマサルケレドモ。サウト云コトヲ知テクレル人ガナイ

をのゝよしき

きのとものり

よひのまもはかなく見ゆる夏虫の迷ひまされる戀もする哉

○アノヤウニ夏虫ノ火ヲトラウト思フテ飛入テ。宵ノ間ヲモエタモタズニツイ命ヲシマウテノケルノハ。キツイアハウナコヂヤト思ハルガ。ワシヤ又此ヤウニ人ニアヒタイ〳〵ト思フテ戀ニ身ヲシマウノハ。アノ夏虫は燭蛾なり

夏虫ノ火ニマヨウノヨリハ。ナホマサツテサテモ〳〵マアアハウナ
カナ。餘材。よひのまの説たがへり。清溯

夕されバ螢よりけにもゆれども光見ねバや人のつれなき

○毎日夕方ニナレバ。螢ヨリモナホワシハ。思ヒガモエルケレド。ワシガ此ヤウニモエル思ヒハ。螢ノヤウニ光リガナイニヨツテ。見エヌユエニ人ガツレナイカシラヌ。光リガアツテ見タナラヨモヤカウツレナウハアルマイ

万葉には勝異殊等の字をけとよみてとにまされる義とす

さゝの葉にむく霜よりも獨ぬるわが衣手ぞさえまさりける

○サヽノ葉ヘフツタ霜ハキツウサエルモノヂヤガ。ソレヨリモヒトリネルワシガ袖ガ。ナホキツウサエテ寒イワイノ

衣手といへば袖のことなり

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しろ

上は序にてかゝれたるところなく

りける

○巳イヤモウキツウ〳〵キエ入ルヤウニ戀シイワイノ

餘材打聞ともに。きへかへりの説わろし。すべてわきかへりしにかへりあぢいふ類みな。其事のいたりて甚しきをいふ詞なり。今世の語にも。にえかへるひえかへるあぢおほくいふと。同じことなるをや。

河の瀬にあびく玉藻のみかくれて人に逢られぬ戀もする哉

○川ノ瀬ノ底ニハエテナビイテアル藻ノ水ニカクレテシレヌヤウニ思フ人ニシラレヌ戀ヲワシハマアスルヿカナ

新撰万葉にきゝのかきはにおく霜の消かへりてもあはんとぞ思ふとありて冬の歌に入られたり

かきくらしふる白雪の下消にきえて物思ふころにも有かな

みぶのたゞみね

○雪ノ下カラ消ルヤウニ。ワシハ人ニハ云ハズニ此ゴロハホンニ消入ル

みをつくしとは舟のかよふところを水尾と云フ又れに標の杭をたつるなりつは助詞にて水尾杭なり延喜式に難波津頭海中立澪標土佐日記にみをつくしのもとより難波につきて河尻に入とあり

玉のをばかりはしばしのはどといふにいへり

ヤウニ物思ヒチマアスルコカナ

一藤原おき風

君こふる涙のとこにみちぬれば身をつくしとぞ我はなりけり

○ミチツクシト云モノハ海ノ中ニ立テアルモノヂヤガ。ワシハ君ヲ戀シウ思フテ泣ク涙ガ。テウト海ノシホノミチタヤウニ。床イツパイニ。ミチタレバ。ソノ床ニヲテ居ルワシガ身ハ。トントソノミヲツクシニサ。ナツタワイ。ソシテソノミヲツクシト云フ名ノトホリニ。身ヲツクシテシマウテノケルデアラウ

逢ぬる命いきるもやするとこゝろみに玉のをばかりあはんといはなん

○トウテ戀デ死メル此ノ命ガ。若シヒヨツト。生ノビルコモアルカ。物ハタメシヂヤニドウヅ。短イ玉ノ緒ノアヒダホドナリトモ。ヒヨツト逢ウト云テクレカシ

わびぬれば逢ひて忘れんと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

○トツトモウ戀ニナンギシハテタレバ。ドウヅシテムリコ此事ヲ忘レント思ヘド。夢ニ逢ウト見ルコガアルニヨツテ。又ヒヨツトアハレルコモアラウカト。ソレガ頼ミニ思ハレテ。ソシテアハレモセヂバ。アヽ夢ト云モノハ。人ニ頼モシウ思ハセテオイテ。何ソノヤクニタヽヌモノヂヤ打聞ニ。人だのめを人だのまれとあるはたがへり。人だのませとこそいふべけれ。めは即ませのつゞまりたるなり

よみ人しらず

わりなくもねてもさめても戀しきり心をいづちやらばわすれん

○ナラヌコトヲムリニ此ノヤウニマア。サテ〳〵ヲテモオキテモ戀シイコ

新撰万葉にはわりなくが脩てもさめても戀〳〵てうらみをいゴちやりて忘れんとあり六帖には上の句これと同じく下の句は今とおなじ

今の本には名にやのこらんとあり新撰万葉に名にや立なんとあるが聞にやすくとあるがまさりもよろし

こがるゝ色など云もみな火より云さらばもゆる火の色に出ましをどいふを色燃なましといひしなり色もゆると云もやがて火の色の名あり

トカナ。コレデハドウモタマラヌガ。此心ヲドウヘヤッタラ。此戀ヲワスレルデアラウゾ

戀しきよわびてたましひまどひなばむなしきからの名にや殘らん

○此ヤウニ戀シイノニ。トット難義シハテヽ。モシヒヨット魂ガマヨウテドコゾヘインデシマウタナラバアトハ此身ハムナシイヌケガラニナルギヤガ。ソシテ思フ人ニアヒモセヌムナシイ戀ノクセニ。戀デ死ダト云フガ殘ルデアラウガ。四の句は。魂のさりてむなしきからとある意を。逢事なくて。むなしき戀ながらにといふ意に、いひかけたるものなり、

紀貫之

君こふる涙ぞなくはからころもむねのあたりは色もかはるなまし

○君ヲ戀シウ思フワシガ胸ハ思ヒノ火ガモエルケレドモ泣ク涙ヲケセバコソアレ。モシ此涙ガナクバ。衣物ノムネノアタリハ。思ヒノ火デモエル色ニナルデアラウ

題しらず

よとゝもに流れてぞゆく涙川冬もこほらぬみなわなりけり

○川ハ冬ハ氷ッテ流レガトマルモノヂヤガ。ワシガナクコノ涙ノ川ハシヤウヂウ流レテトマル時ハナイ。冬デモ氷ラヌ水ヂワイ

○千秋云。歌にみなかとあるを。水のほとは譯せずして。たゞ水とのみ譯せられたり。これをもてすべて歌の譯法を思ふべし。又この歌みなわとよめるは。水とのみにては詞たらざる故なるとをもさとるべし

夢路よる露やおくらんよもすがら通へる袖のひぢてかわかぬ

○夢ニ思フ人ノトコロヘ通フ道ヘモ露ガオクヤラ。ヨヒトヨ夢ニソノ道ヲカヨウタ袖ガ。ヒッタリトヌレテ今朝モカワカヌ。イヤ〳〵ヨウ思

六帖に貫之けさのわさげつゆおきながらにこひしきはあかぬ夢路をこふるなりけり

六帖にまとなきものおもひせばいつはりになみだはかねておとさらまし今と同じ意なるはいづれか前ならん

ヘバサウデハナイ。コレヤ涙デヤワイノ

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞおきうかりける　そせい法師

○タヾチヨツト夢ニデモ思フ人ヲ見タ夜ハ。ソノ朝ノ床ガサ。ハナレテ起トモナイワイ

いつはりのなだみなりせばから衣きのびよ袖はきばらざらまく　かぢはらのたゞふさ

○戀シイフリヲシテ。ウソニ泣テ見セル涙デアラウナラ。隨分人ニ見セウトコソセウケレ。此ヤウニ人ニ見ラレマイト。シノンデキルモノヽ袖ヲシボルヿハアルマイニ

大江千里

ねになきてひぢにしかども春雨よぬれにし袖ととはゞこたへん

○泣テ此ノヤウニヒツタリトヌレタ袖デヤケレド。モシ人ガ問フタラ。春雨ニヌレタノデヤトイハウ

わがでとく物やかなしき時鳥ときぞともなくよたゞ鳴らん　としゆきの朝臣

○時鳥モオレガヤウニモノガカナシイカイ。時シホナシニ夜ヲハヒタモノアノヤウニナゼ鳴クヤラ

さつき山梢をたかみほとゝぎすなくね空なる戀もする かな　つらゆき

○上泣テバッカリ居テ。ウカ〳〵トシテ。心モソゾロナ戀ヲマアスルヿ

夜たゞば夜直なり夜ぞほしになくといふほとのとなりたゞ鳴になくといふはひ鳴に啼といふに同じ

是はたゞ空なる戀をするといはんの上は序なりそうなるとはあなへもこなたへもつくかたなきをいへり

立ゐのうら上に同じ意なりおもはらなくはおもほらぬを延たる詞なり

ある人の秋ぎりのはるゝ時なきといふ様もて立ゐのうらとはいふなり

カナ

秋ぎりのはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもえらなくに　凡河内みつね

○戀ヲスルデハレル時モナイ心デハ。トント起居スルノモソゾロデウカ〳〵トメオボエヌ

虫のこと聲にたてゝはなかねどもなみだのみこそ下にながるれ　藤原ふかやふ

○人ノマヘヲシノブユエニ。虫ノヤウニ聲ヲハナシテハナカヌケレド。ナイショウデハ。涙ヲナガシテバッカリヨ。ヲリマスワイ

是貞みこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋なれば山どよむまで鳴鹿のわれおとらめやひとりぬる夜は

○ヒトリヲタ夜。オレガ泣クノハ。秋デイハウナラ。山デウヘヒゾクホドニナク鹿ニモオトラウカ。オレハ鹿ヨリナホキッウ泣ク

秋なればとは。秋の物にてたとへていはゞといふ意なり。夏なればともあるに同じ。

題しらず　貫之

秋の野にみだれて咲る花の色の千種に物をおもふころかな

○上此ゴロハイロ〳〵サマ〳〵ニ心ガミダレテ。サテモ〳〵コンナ思ヒサスルコカナ

ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふひ　みつね

六帖には二の句をなぐさに咲るといひ四の句をみだれてものをとあれども今の方よろしみだれてを思ひみだるゝにたよれり

稻葉の風にふれてうよ〳〵となる音をう

れよといひかけたり

雲ゐのよをと云は遠きとにいふなり

とのなき

○ヒトリ此ノヤウニ物思ヒチシテ心チクルシメテ居ルニ旨いなばのソレヨ御ダウリヨト云テクレル人ガナイ。ひとりしては。ひとりあり。思へいは思ふにの意あり。みおふるきいひざまあり

人を思ふ心は雁にあらねども雲ゐよのみも鳴わたるかな　ふかやぶ

○人ヲ思フ心ハ雁デハナケレドモ。雁ノ空ヲ鳴テワタルヤウニ。サテモ〳〵ワシガ心ハ。ウカ〳〵トウハノソラニナツテマア。泣テバツカリタテルヿカナ

餘材。二三句の注。ひがとあり。かりそめの意はあし。打聞。雲ゐの説。この歌にはかゐはず。

たゞみね

後撰秋のよに人をしづめてつれ〳〵とかきなす琴のねにぞなきぬる

或抄とかきなすはかきならすなり万葉に聖の字鳴の字をなすとよめり

常よりもまさるといはん序なり

秋風にかきなす琴の聲よさへはかなく人のこひしかるらん

○自身引ナラス琴ノ聲ノ秋風ノ吹クヤウニ聞エルニマデ人ガ戀シイ此ヤウナチヨツトシタヿニマデ。ヂキニ此ヤウニ戀シウ思フハ。ドウシタコトヂヤヤラ

○千秋云。譯に自身トヒキナラスとある。自身といふと。歌に見えず。いかにといふに。これはみづからひく琴にあらざれば。かきなすといへる詞いたづらなり。されば人の琴のねにはあらざるとを。たしかにしめさんために。わきて自身といふとを添られたるなりすべてこの類多し。なほざりに見過すべからず

まこもかる淀の澤水雨ふればつねよりをにまさるわゞこひ　つらゆき

○旦雨ガフレバ。ウツトシウ物サビシイ故ニ。ツネヨリモカクベツニ戀ガマサル

やまとよ侍りける人につかはしける

家の梁には閑やわたらんとあり

物こうびは物のたまひけるを延て云閑なりか〜云は我よりたふとき人なるべしせうこは消息にてもとは人の生死に云閑をうつして安否をとふことなり又うつして文をせうこといひ又たゞ人におとづるゝことにもいふとゝなりね

こえぬまはよし野の山の櫻花ひとつてにのみ聞渡る哉

○ソチノ大和ノ國ヘマダコエテイカヌウチハ。見タイ〳〵ト思フ吉野山ノ花ヲ。人ノハナシニバカリ聞テクラス。ヤウナモノデ。大和ニゴザルオマヘノ一チ。ワシガツチ〳〵戀シウ思フノモ。ソノトホリヂヤアシンキナコカナ

初句は。あはぬまはといふ意にいへるにはあらす。

やよひばかりにものゝたうびける人のもとに又人まかりてせう今こすときゝてよみてつかはしける

露ならぬ心を花よおきそめて風ふくごとよ物おもひそつく

○花ニハ露ガオクモノヂヤガ。ソノ露デハナイワシガ心ヲ。オマヘノ花ニオキソメテ井ルユエニ。風ノ吹クタビニ。花ガヨソヘチラウカトソコヘ心ガツイテ。思ヒコトガゴザル。ドウカヨソヘチリソウナウハサモ。チラトウケタマハツタゾエ

題しらず　坂上これのり

我戀はくらふの山の櫻花をなくちるとも數はまさらじ

○暗部山ノ櫻花ノサイチウトヒマモナシニチル數ハオビタヽシイコデアラウケレに。ワシガシゲウ思フ數ニクラベタナラマサリハスマイ

むねをかのおほより

冬川のうへはこほれる我なれや下にながれて戀わたるらん

○ワシハ。ウハツラノ氷ツテアル冬ノ川ヂヤヤラシテ。其氷リノ下ヲ水ノ流ルヤウニ。外ヘハアラハサズニ。心ノ内デ。長月日ヲ戀シウ思フテタテル

たゞみね

山の名をゝらぶるにいひかけしのみ

ふゆがはとにこりてよむ

上は浮たるといはん序なり

後撰にか〜衣かけてたのまぬ時うなき人のつまとは思ふものから中ふにおもひかけてはからころも身になれぬをうらむべきかな

しきたへは冠辭なり

濁たきつせにねざしとゞめぬうき草の浮たる戀も我はするかな

○早イ川ノ瀬ニアル浮草ノ根モトノ。底ヘツカズニウイテアルヤウニ。

ワシハウイタ戀ヲマアスルコカナ

よひ〜にぬぎて我ぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

とものり

○巳心ニカヽッテカタ時ノマモ思ハヌコトハナイ。○千秋云。ぬるとてわがぬるは。ぬるとてわかぬゞといふ意なり

東路のさやの中山なか〜に何しか人をおもひそめけん

○アハレモセヌ人ヲ巳ナマナカニ。ヤゼニ此ヤウニワシハ思ヒソメタコトヤラ

しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめはおひずぞありける

○巳枕ノ下ニ涙ノ海ハアルケレド。戀シイ人ヲ見ルメハッ。ハエヌコトヤワイ

年をへてきえぬ思ひはありながらよるの袂はおほこほりけり

○何ン年カギエズニモユル思ヒノ火ハアリナガラモ。夜ル〜ソレデモヤッパリ袖ハナミダガ氷ルワイ。思ヒノ火デトケサウナモノヂヤニ

つらゆき

我戀はあらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

○シラヌ山道コソマヨウモノナレ。ワシガ戀ハシラヌ山道デモナイニ。此ヤウニマヨウ心ハ。ツライナンギナコヂヤワイ

くれなゐのふり出つゝなく涙には袂のみうら色まさりけ

家集には三の句あらねとも六帖には下の句などか心のまどひけぬべきとあり

れ

○聲ヲアゲテ泣ク血ノ涙ノ紅ハ。ソメルタビニ。袖バツカリガサ。色ガマスワイツチニ紅デ衣ヲ染ルノハドコモカモ同ジヤウニコソ染メルモノナレ。此ヤウニ袖バカリ染メルモノデハナイニサ。初二句。夏の部に。からくれなゐのふり出てぞあく。とあるとは意異あり。この歌にては。紅といふに用あり。ふり出は紅をふり出て染ることを。聲をあげてあく事にかねたり。餘材四の句の説わろし。

家集には末の句なりぬべしなりとあり

白玉と見えし涙も年ふればからくれなゐにうつろひにけり

○始メノホドハ白イ玉ノヤウニ見エタ涙モダラ〳〵ト年ガヘレバマツカイニ。色ガカハツタワイ

夏虫を何かいひけん心からわれも思ひにもえぬべくなり

○夏虫ノ火ノ中ヘハイツテ心カラ身ヲモヤシテシマウヲヲ。ヱ〳〵ハカナイオロカナヲヂヤトハナゼニ云タヲヤラ。夏虫バカリデハナイ。オレモ其通リニ心カラ思ヒニ身ヲシテノケルデアラウヤウニ思ハル〳〵

たゞみね

風ふけば峰にわかるゝ白雲のたえてつれなき君がこゝろか

○国サテ〳〵ルサモナイ。ケシカラヌキヅヨイ。君ガ心カナ

上は序にいひて絶てつれなきと云なり

月かげに我身をかふる物ならばつれなき人もあはれとや見ん

○月ヲバ。惣体。人ガアヽハレト思フテ見ルモノヂヤウガ。ワシガ身ヲ月ニカヘラル〳〵モノナラ。カハツテ月ニナツテ見タイ。ソシタラツレナイ人ヲ見テ。アヽハレカアイヤト思フテクレルデモアラウカイ。餘材。

今の歌拾遺にふたたび入て四の句おもはぬ人もとあり六帖には相思はぬと三題に入る

影といふに心をつけたる詠わろし。月かげは。たゞ月あり。

ふかやぶ

こひしなばたが名はたゝじよの中のつねなき物といひはなすとも

○ワシガモシ此通デ戀死ンダナラバ。ツレナイ人ハ。深養父ハカワイヤ。ワシユエニ死ンダトハイハズニ。タヾ一通リニ世中ガ無常ナ物デ死ンダヤウニ云ヒナシテオクデガナアラウガ。タトヒサウハイヒナスに世間ノ人ハヨウ知テ居レバ。外ノ事デ死ダトハ云マイ。君ユエニ死ダト云ヒフラシテ君ガ名ハ立ツテアラウ

貫之

津の國の難波のあしのめもはるにしげき我戀人しるらめや

○難波ノ蘆ノハルカニ見エル所マデ。ビツシリトシゲウハエテアル如クニシゲイ此ワシガ戀ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ。コレホドコアラウトハ知ルマイ。めもはるにといへるは。たゞ見渡しのはるかなる意のみなり。蘆の芽又張ル春なぞの意はあし

手もふれで月日へにける白らま弓おきふしよるはいてぞねられぬ

○弓ヲ久シウ手モサヘズニオクヤウニ。思フ人ニ久シウアハテバ。其人ノコトバッカリ思フテ。夜ルハチタリオキタリシテ。ヨノメモナテラレヌワイノ

人しれぬ思のみこそわびしけれわが歎きをば我のみぞしる

○思フ人ニ知ラレヌ戀ホドヲ。ナンギナコマッタモノハナイ。此ワシガ歎クノヲバ。ワシバッカリガ知テヰテ。ソノ思フ人ハチカラシラヌデヤ

ともののり

弓におきふしと云とはいにしへの弓射るさまは今とたがへり左のわきまで引ふせてひきはなちおこしなどせしよりゆみにおきふしのことをよめるが古歌に多し

家集にむかし物などいひし女のなくなりしかばあか時がたの夢に見はて待らでさめ待りにしかばとありて今の歌あり

とに出でいはぬばかりぞみなせ河さたに通ひて戀しき物を

○ワシガ戀ハテウド。水無瀬川ノウハベハ水ノナイヤウニ見エテ。下ノ方ヲ水ガトホテ流レルヤウナモノデ。詞ニダシテイハヌト云フバカリギヤヅイ。心ハジヤウギウ思フ人ノトコヘ通ウテ戀シイモノヲ

みつね

君をのみ思ひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

○オマヘノコトバツカリヲ思ウテ寢テ見タ夢ナレバ。逢ウト見タノモオマヘノナサケデハナイ。ワシガ心カラ見タノギヤワイ

たゞみね

命にもをさりてをしくある物は見はてぬ夢のさむるなりけり

是は弓を引は我方に本末のよるものなればよるに夜を云ひかけて上は序なり

新撰万葉にこひわび

○イノチホド惜イ物ハナイギガ。ソレヨリマダ惜ウ思ハレルモノハ戀シイ人ニ逢ウト見ル夢ノマダトクト見テシマハヌウチニ早ウサメルノギヤワイ

はるみちのつらき

あづさ弓ひけば本末わゲ〳〵によるこそさされ戀の心は

○萱ヨリモ夜ルガサカクベツニ戀シウ思フ心ハマサルワイ

みつね

我戀はゆく〳〵も去らずはてもなしあふをかぎりと思ふばかりぞ

○ワシガ戀ハタトヘテイハヾ道ヲイクニ。ドコヘイクコヤラサキモシレズ。ドコマデト云カギリモナイヤウナモノデドウナルコヤラヲカラサキノシレヌコデ。タヾアウノヲイキドマリト思フバカリデヤ

われのみぞかなしかりける彦星もあはで過せる年しな

ぬ天の河原へゆきしかわたる彦星ありといふなり

この歌後撰にひさしくいひわたり待りけるにつれなくのみ待

ければ

○世ノ中ニオレホドカナシイモノハナイワイノ。彦星ノ戀ガ一年ニタツタ一度ツヽナラデハアハレチバ。カナシイヤウナモノナレド。ソレモ年ニ一度ヅヽハチガヒナシニ逢ウヿガアツテ。一年モアハズニスギタ年ハナケレバ。ワシホドコカナシイ戀デハナイハヂテ

ふかやぶ

今はゝや戀ゑなましをあい見んと頼めしとぞ命なりける

モウハヤ今ゴロハ。戀死ンデシマウデアラウニイツヅヤ逢ハウト。アテラカラ約束シテオイタヿガアルヲ頼ミニシテヂ。ソレバッカリガ命デマダカウ生テ居ルワイノ

みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はゑらなん

○イク度カ〳〵。逢ハウト約束シテ頼ミニサセラオイテハ。アハズニ何ン年カタツ。ダマシゴトニコリズニヤツパリタノミニ思フワシガ心底ノ深イトコロヲ推量シテクレカシ

ともより

いのちやは何ぞは露のあだ物をあふにしかへばをゝからなくに

合ガサ何ンデヤヅイ。ホンノツユノヤウナアダナモノデヤモノ。逢フニカヘテナラ。コノイノチシマウノハヲシイヿハナイ

頭書古今和歌集遠鏡卷之十二終

りければなりひらの朝臣とて伊勢が返しありこは批把左太郎仲平公の官位ひくき時の歌にてなかひらの朝臣とかな書したらんをなりひらにうつしなせしものよ業平と伊勢と時代かなはずこの問答も伊せ物集に入て批把殿なりさて批把殿は躬恒と時を同じうするをこの集に躬恒が歌として入しといとも不審なりことにいせが返し歌もあればかへすゞ〳〵いぶかしきとなり

物ちのらはなどゝいふに同じく助けながら他をもかね又はろのとゝをさだかにいはぬにも用ふ詞なり

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十三

戀歌三

やよひのついたちより志のびに人にものいひてのち後に雨のそぼふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしてはるの物とてながめくらしつ

○オキルデモナシネルデモナシニ。ウツラ〳〵トシテ夜ヲアカシテハ。又晝ニナレバ。此ゴロノ空ノヤウニ。長雨ハ春ノモノデ一日ナガメテ。シンキニ思フテクラスヂヤ

なりひらの朝臣の家に侍ける女のもとによみてつかはしける

これも長雨に物思ひのながめをかねたり

つれ〴〵のながめにまさる涙川そでのみぬれてあふよしもなし　とし行ノ朝臣

○ウナツドイテ日ヨリハワルシ。日ハ長シヒマデサビシイニツケテハ。イヨイヨシンキデナガメチシテ。涙ノ川ノ水ガマシテ。袖ガヌレルバツカリデソシテ川ノ水ガマセバ渡ラレヌヤウニ。逢ハレサウナモヨウモナイ

かの女にかはりてかへしによめる　なりひらの朝臣

淺みそて袖はひづらめなみだ河身さへ流ると聞ばたのまん

袖ガヌレルトオツシヤルガ。ソレヤオマヘノ涙川ガ淺ヤニヤサウデアラウソデバツカリ。ヌレルグラサノ淺イ〻デハ。頼ミニナリマセヌ。身マデガ流レルトオツシヤルクラヰ涙川ノ深サナラ。ソレデハ頼ミニ致シマセウ。餘材打聞。四の句の説わろし。身さへあがるとは。たゞ袖のみひづるにむかへて。深きとをいへるのみなり。たとへたる意はなし。

題しらず　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき

近ウヨルテスヂガナサニ。身コソカウシテ遠ウヘダテ、居レ。心ハヤウヂウオマヘノソバチハナレハセヌ。影ノヤウニドウカラ心ハオマヘニソウテ居ル。餘材に。古はよるといふとを。よるべといへり。とへるはひがとなり。さるとなし。引たる万葉の歌のべは。可の意あるを。心得あやまれるなり。

よるべは寄方なりなみはなゝしてなり

いたづらに行ては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

物故には物ながらになり此歌いせ物がたりにては例のつゝり

となれば雖なし六帖に人まろの歌させしはいぶかし

是もとるべからず詞ゴかひしらべのさま人まろには似もつかぬものゝ

上の句歌といはで有下はなみだをいはで涙をしらせたり

かれなでは別なでの上裏なりこゝにては絶すといふほどのことに聞べし

行デハムダニカヘッテクルモノヽクセニ。逢ヒタイト思ウ心ニサソハレテハ又シテモイキ〳〵スルワイ。ドウ云テモトカク逢ヒタクサニヤ

あはぬ夜のふる雪と積りなば我さへともにけぬべき物を

雪ノツモルヤウニ逢ハヌ夜ガイク夜モ〳〵ツモッタラ。ソノ雪ノキエルヤウニワシモデガトモニ消ルデアラウト思ハレルモノヲ。サテモアハレヌヲカナ

此歌はある人のいはく柿本ノ人まろが歌なり

なりひらの朝臣

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはでこしよぞひぢまさりける

○秋ノ野デ笹ノ中ヲ分テトホッテキタ朝ノ袖ハキッウ露デヌレルモノデヤガソレヨリモ思フ人ノ所ヘイテ。エアハズニモドッキタ夜ガ。ナホキッウ涙デ袖ガヌレルワイ

小野ノ小町

見るめなき我身をうらと志らねばやかれなであまのあしたゆく〳〵る

○海松メノ無イ浦ヂヤト云フヲシラズニ海士ガミルメラ苅ウト。思フテヒタモノ來ルヤウニ。アノ御人ハワシガ身ヲ。ドウモ逢ハレヌ身デヤトハ知ラシヤラヌカシテ。一夜モカヽサズニ足ノダルイニ。毎夜〳〵逢ウト思フテ見エル。トテモアハレハセヌノコサ

初二句の意。むかしより訛得たる人おし。是は春かけてなれどもいまだ雪はふりつゝといへる類にて。詞を下上に打かへして心得べき格なり。我身を見るめなき浦としらねばやといふとあり。見るめなき浦とは。逢かたき身といふ意なり。浦はたゞ見るめによれる詞のみなり。されば我身をうらむともうしともいひかけたるにはあらず。さて後にわが身の

うらとよめる歌多きは。この歌の詞によれるものあり。

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はん　源宗千朝臣

○今夜ハゼヒトモドウアッテ。モト思フタニ。又トウ〳〵エアハズニアカスギヤサウナ。今夜アハイデハモウ逢ウベキ時節ハナイニ。此トホリデエアハズニ夜ガアケタナラ。春ノ此ノ日ノ長イノニシンキニ思ヒクラシテ。四イツマデモツライ人ヤ〳〵ト思フテ一生ヲタテルデガナアラウ

有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし　みぶのたゞみね

○マヘカタ女ト暁ニ別レタキニ。有明ノ月ヲ見タレバ。シキリニアハレヲモヨホシテ。アヽ月ハ夜ノアケルモシラヌカホデ。アノヤウニヂットユルリトシテアルニオレハ夜ガアケレバ。カヘラネバナラヌコトヲ。ノコリ多イトコロヲ別レルコトカヤト。身ニシミ〳〵ト思ハレタガ。其ノ時カラシテ。ヨニ暁ホドウ。ツライモノハナイヤウニ思フ

餘材に上句を。あはずしてかへる意とせるは。歌の入りどころにおづめるひがとあり。顕注の如く。逢てわかれたるあり。然るをこゝに入れたるは。ふとところをあやまれるあり。六帖もこの集によりてあやまれり。

こは消に無きをかけてみな波の縁もてつゞけたり且ツ波はわれによろへていふなり

あふをのなごさにしよる波なればうらみてのみぞ立かへりける　ありはらもとかた

○浦ノ磯パタヘヨッテクル涙ノ。ヂキニ引テ沖ノ方ヘカヘルヤウニ。逢モナイ人ノ所ヘイクワシナレバ。イツデモソノ人ヲ恨ンデバッカリヲカヘルフイ　よみ人しらず

これは風に先だつ名とつゞくるに涙といへり

上は名をとりてといはん料なりとるとは我におふ心なり日本紀に頁の字をとるとよめり名を頁は名をとるといふに同じきをおもへ

かねてより風にさきたつ波なれやあふとなきにまだき立つらん

○マダ逢フタフモナイサキオラ。早ウ名ノタツノハ。云テ見ヤウナラ涙ハ風ノ吹クニヨッテタツモノヂヤニ。マダ風ノフカヌサキニマヘカタカラ。ナギニ涙ノ立ツヤウナ物カシラヌ。ナゼコノヤウニマダ早ウ。カラ名ノタツコトヤラ

たゞみね

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり

○因ナイフヲ云ヒ立テテ。名ヲタテラレテハ。メイワクナコトヂヤワイ

みはらのありすけ

あやなくてまだき名の立田河渡らでやまん物ならなくに

○マダ早ウカラ此ノヤウニ名ノタツハ。ワケノタヽヌフヂヤトテモカウ名ガタツタカラニハ。ドウシテナリトモ。逢ズニオカウモノデハナイ

もとかた

人はいざ我はなき名のをしければむかしも今もさらずとをいはん

○人ハドウアルカ。ワシハナイフヲ云タテラレル名ガ惜ケレハ。マヘ方モ今モソンナコトハシリマセヌトハ云ハウ

よみ人さらず

こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬよにしすまへば

○マヘカタモナイフヲ。云ヒ立ラレテ。メイワクシタフガアッタガ。ソレニコリモセズニ又ドウヤラ。名ヲタテラレウヤウニ思ハレル。世ノ中ノナラヒ。デニクウナイ人ガアルデッ

後撰集には大つぶねに物のたらびつかはしけるを更に聖入れざりければつかはしける元真親王大かたはなぞやわが名のをしからんむかしのつまと人にかたらん返し大つばね在原棟梁ノ女とありて今の歌あり元方も大つふねもともに棟梁の子なれば此集には元方の姉とか妹とかありつらんを文字の落たるをうつしたへしならん

こりずまはこりずまひといふ詞なるべし

一度てりたることはすまじき事なるを又もすまじてするといふとすべしまふはかた人にまけじ心してすまふなり

人しれぬは人にしらせぬの約めなるべし又知られぬともいふべし

ひむかしの五條わたりに人を志りおきてまかりかよひけり志のびなるところなりければかどよりもいらでかきのくづれよりかよひけるをたびかさなりければあるじきゝつけてかの道によごとに人をふせてまもらすればいきけれどにあはでのみかへりよみてやりける

なりひらの朝臣

人志れぬわが通ひぢの關守はよひ〳〵ごとにうちもねなん

○人ニシラサヌオレガ通ヒミチノ關所ノ番ハドウゾ毎夜〳〵ニチヨツトナリニテムツテクレカシ。ソシタラソノ間ニハイラウニ

つらゆき

題志らず

志のぶれど戀しき時はあし引の山より月のいでゝころくれ

○ズイブンカクレシノブケレキドモ。ツウ戀シイトキニハ。エコラズニ月ガ出テヨウ見エルノニ。此ノヤウニ出テサツルソイ。又三四ノ句は。たゞ出ての序のみとゝもずべし

よみ人志らず

こひ〳〵てまれにてよひはあふ坂の夕つゞ鳥は鳴ずもあらなん

○ハラ一パイ戀クテ。タマ〳〵コヨヒ始メテ逢フタコ。ドウゾ今夜ハ庭鳥ハマアナイテクレチバヨイガ。鳥ガナケバオキテ別レチバナラヌニ

をの〻こまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへばとぞともなく明ぬるものを

小町集にはあひとあへばと見えたりあふてへばは逢といへばのつゞめなり

しのゝめはいなのめと同言にて明行うちのけしきなり

○秋ノ夜ヲ長イモノヂヤト云モ名バカリヂヤワイ。タマ〳〵戀シイ人ニアウ夜トイヘバ。コレガカウト云フモナシニ。ツイ早ウ明タモノヂナンノ秋ノ夜ガ長カラウヅ

長くとも思ひゞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば　凡河内ノみつね

○秋ノ夜ハ一ッタイ長イモノヂヤケレドモ。アウ人ニヨッテ。秋ノ夜デモ。ミヲカウオホエル物ヂヤト。昔カラモ云トホリデ。此ノ節ハ秋テ夜ノ長イ時節ナレドモ。スイタ人ニ逢フタ夜デヤニヨッテ。長イモッドウモ思キヒハメラレヌ

志のゝめのほがら〳〵とあけゆけばおのがきぬ〴〵なるぞかなしき　よみ人しらず

○目ガサメテ。夜ガクワラリット明テクレバ。一ッニナッテチテ居タ二人ノキルモノガ。別々ニナッテ。ソカレルガヲカナシイ餘材。きぬ〴〵の説。いさゝかたがへり。面ゝとりさるを。きぬぎぬといはず。千秋云。結句。題注本に。きるぞかおしきとあるぞ。よろしかるべき。あるぞは。おだやかあらず聞ゆ。密勘に。又書寫のあやまりにやとのたまへるは。きるぞのと歟。あるぞのこと歟。

六帖には閑院ノ大臣の歌とす閑院大臣は時平公なり

いひしらぬは詞もなきほどの思ひがりふなり

あけぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひうふらん　藤原國經ノ朝臣

○夜ガアケタト云テ。サアモウ別レルヂヤト思フ心ガツクカラシテ。ナゼニ此ノヤウニイフニイハレヌ思ヒガソフコトヂヤヤラ

ときされはこきおろすがごとき事に云

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌　とし行ノ朝臣

あけぬとてかへる道にはてきたれてあめも涙もふりうし

花ときちらし稻こきたれなど云たればおろすといふ心なり

六帖にには島にあらぬねにても聞なんあけぬるとをわれ鳴しかは

ほちつゝ

○此ヤウニ雨ガツヨウフルノニ。夜ガ明タト云テ。別レテ歸ル道デハ。涙モ雨ト同ジヤウニモノヲコキオロスヤウニヒク〳〵ト落テ。イヨ〳〵ヒツタリトヌレテ。サテモ〳〵カナシイナンギナコカナ

題しらず　寵

しの〳〵めの別れを〳〵しみわれぞまづ鳥よりさきに鳴はじめつゝ

○目ガサメテ別レルガナゴリヲシサニ。鶏ヨリサキヘワシガサマヅ泣キハジメタ

時鳥夢かうつゝかあさ露のおきてわかれしあかつきのこゑ　よみ人しらず

○目オキテ別レタ曉ニ今鳴イタ廓公ノ聲ハ。聞テモ夢ヂヤカウツゝヂヤカオボエヌ。心ガ亂レテアルニヨツテサ。打聞よろし。よざいわろし

玉くしげあけば君が名たちぬべし夜深てこむを人見けんかも　大江千里

○日夜ガ明テカラカヘツタナラ。人ガ見テ君ガ名ガタヽウト思フテマダ夜ノ深イウチニ別レテキタガ。ソレデモモシ人ガ見ハセナンダカシラヌ

けさはしもおきけんかたもしらざりつ思ひいづるぞ消てかなしき

○ケサハマア別レニ心ガ亂レテ。ドウシテ起テキタヤラ。チカラオボエナンダガ其ノ事ヲ思ヒダシテ。今サキエルヤウニカナシイ

打聞日影の說あれどさまではあらじ

玉くしげはあ〳〵るといふ冠辭なり

けさはにてしもは助語なるを朝霜の置にいひかけてさておき來りけん方も知ざりつるがかへり來りては思ひいづるに消かへるばかり悲しきと云ておもひのひを日に取なして日影に霜

のきゆるをかねたり

業平の伊勢に下向の事たしかなるものに見えずいせ物がたりにいもゝ狩の使の由にいへどうれもたしかなるよりどころを見ず

人に逢て朝によみてつかはしける

なりひらの朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにも成

まさるかな

○ユフベ逢テ寐タノハ。ドウデアッタヤラ。夢ノヤウデアマリハカナサニ。セメテハホンノ夢ニナリたい。マイナド見ヤウト存シテ。眠ッテミレドチラレモハ致サヲバ。夢ニサヘエ見イデ。サテモ〳〵イヨ〳〵ハカナイコトニナリマサルコトカナ

業平の朝臣いせの國にまかりたりける時齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

君やこし我や行けんれもほらず夢かうつゝかねてかさめてか

○タベノ事ハオマヘガワシガ方ヘ御出ナサッタデアッタヤラ。ワシガオマヘノ方ヘ參ッタデアッタヤラ。又夢デアッタカ。ホンマノコトデアッタカ眠ッタ内デアッタカ。目ガサメテ居ルウチノコトデアッタカ。ドウデアッタヤラワシヤチカラ覺エマセヌ。オマエハドウザヤイナか。へし

なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

○サイナユウベノコトハ。イツソ心ガクラカッテ。闇ノ夜ニ道ナイクヤウデドウデアッタヤラ。ワシモサ一向オボヘマセヌ。夢デアッタホンマデアッタト云コトハ。世間ノ人メ定テクレイ

題しらず

よみ人しらず

をさなく世人といへるがかぎりなくめでたし

六帖に「あし引の山下とほる月かげにあかずも人にあひ見つるも」また〻同歌なるを詞のかはかはりたるなり

難波のみつを見つにかけたる序なり

うば玉のやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

○闇イノニ。チヨツト逢タノハ。ホンマノコトデモ。タシカナ夢ニ何ホドモマサツタコトハナイワイ。夢ニ見タト同シクラヰノコトデアツタ

さよふけてあまのと渡る月かげにあかずも君を逢見つるかな

○君ニ逢フテサテモ〳〵マア〳〵ノコリオホカツタコトカナ

三の句のには。のゝあやまりにて。上句はあかずの序なるべし。萬葉に例多し。

君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきとわいはじ

○ドウゾオマヘノ名モワシガ名モタヽヌヤウニセウ。ワシニ逢タトオマヘモオボシヤルナ。ワシモオマヘニ逢タト云マイホドニ

名取川陸奥の名所なり。うもれ木は久しくうづもれたる木なり。谷のうもれ木などゝもいへり

水の心とは水中と云がごとくさてたゞ云かけしのみなり

ゆめはいましめいさめなど言詞をつゞめたるなり

あひさは難波の縁に。網引にいひよせたるなり

名取川せゝのうもれ木あらはればいかにせんとか逢見うめけん

○世間ヘシレテ名ガタツタラ。ドウセウト思フテ。逢ヒツメタコトヤラ

よし野川水の心はやくとも瀧の音にはたてじとぞおもふ

○吉野川ノ水ノ早イヤウニ心ニハヤルセナウ思フ。瀧ノヤウニ音ニハタテマイトサワシヤ思フ

戀しくばまたにを思へむらさきの根ずりの衣色にいづなゆめ

○戀シウ思フナラ心ノ内デ思フテ居タガヨイゾ。圖色ニタヽスデハナイゾ。カナラズ〳〵

をのゝはるかぜ

これは下に心のむすぼふれると云ッのみさて花すゝきは穂にいでゝかふといひ下ゆふ紐といひて結ふれといふともに冠辭なり古歌にこの体多し

花すゝきほに出でこひは名を惜み下ゆふ紐のむすぼうれつゝ

○アラハシテ思フダナラ。名ガタツデアラウトソレガオシサニ。心ノ内デバッカリ思フテ。ムシヤクシヤトシテ。サテモ〳〵苦シイ戀ヲスルヿヂヤ。打聞。下ゆふ紐の説俗たり

おもひあまりてのうたなり

たちばなのきよきがもとのびにあひもれりける女のもとよりれこせたりける

よみ人しらず

思ふどちひとり〳〵が戀しなばたれによろへて藤衣きん

カウ思ヒアウタドウシノ内ニオマヘカワシカドヂラヅ。一人ガ若シヒヨット戀死ンダナラ。服ヲ着ヤウナレド。表ハレタ夫婦デナケレバ。服ハキニクイヂヤガ。親類ノ内ニ誰ガ死ンダニヨッテキルト云テ。服ハキタモノデアラウヅ　餘材。ひとり〳〵を我事にとれるはわろし。打聞よろし。すべてひとり〳〵といふは。みな俗言にどちらぞひとりといふ意あり。

かへし

なきこふる涙の袖のろほぢなばぬぎゝへがてらよるころはきめ

たちばなのきよき

○ナルホドソンナ物ヂヤ。モシワシデモソナタデモドチラヅ戀死ンダ時ニハカナシウテ泣テ戀シタウ涙テ。定メテ袖カキツウヌレルデアラウ。ソシタテヌレタチヌギガヘガテラニ。夜ルサ服チバ着ヤウハサテ。夜ルナライカウタレモ知ルマイホドニ

題しらず

こまち

うつゝにはさもこうあらめ夢にさへ人めをもるゝと見るがわびしさ

人めを守るは人目をはゞかりつゝしむを云

○ホンマニハサウモアリソナモノヂヤガ。夢ニマデ人目ヲハヾカルヤウニ見ルヿノナンギヲワイノ

かぎりなき思ひのまゝによるもこん夢路をさへに人はとがめじ

○カギリモナイホド思フコノ心ニマカセテ。セメテ夢ニナリトモセイダシテ行テ逢ハウ。ホンマニ通フハカクベツノヿ。夢ニ通フ道マデヲ。人ハ見トガメハスマイドホニよるもは夢にありともの意あり下に夢路といへる故に。詞をかへてよるとはいへり。こんはゆかんの意あり。この例つねにおほし。

夢路にはあしもやすめず通へどもうつゝに一めみしぞとはあらず

○夢ニハ足モヤスメズニ。毎夜セイダシテ通フテ。タビ〳〵逢フト見ルケレドモ。ソレデモイツヂヤ。チヨツトホンマニ逢タヤウニハナイア

後撰に思ひ江のよな〳〵夢に見しことをたゝかた時のうつゝともがな

、夢ハヤクニタヽヌモノヂヤ

よみ人しらず

思へども人めつゝみの高ければ川と見ながらにころわたらねば

○穩シウ思フ人ヲ見テハ。アヽアレハト思ヒナガラモ。人目ヲツヽム心ガイツハイヂヤニヨツテドウモヨウヲアハヌワイ

四の句。かれはといふことを。川にいひよせたり。

瀧つ瀬のはやき心をなにしにも人めつゝみのせきとゞむらん

○早イ川瀬ノヤウニヤルセモナフ思フ心ヂヤモノヲドウ云フデヤア。堤デ川ノ水ヲセキトメルヤウニ。人目ヲツヽンデ。此ヤウニコラヘ忍ンデクルシイメヲスルヿヤラ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

後撰に故郷をかはと見つゝもわたるかな瀧せありとはむべるいひけん又枕の草子にくゞれよるいもせの山の中なればさらによしのゝかはとだに見しと云もかれはとも見じの心なり

かくれぬは陸沼にて草など生しげりたる沼なり

後撰にふたゝび入て四の句下にかよはんとあり

くれなゐの色にはいでじかくれぬのまたにかよひて戀は出ぬとも　きのとものり

○国此ヤウニ心ノ内デバッカリ思フテ居テ。タトヒ戀死スルト云テモ日色ニハダスマイ。餘材打聞ともに。下に通ひてを。たかひの心といへるは。わろしかよひとは。たゝ沼水の緣の詞にていへるのみにて。歌の意はたゞ下に思ふとあり。

題しらず　みつね

冬の池に住にほ鳥のつれもなくうこに通ふと人にしらすな

○国其所ノ家ヘワシガ通フト云フテヲ人ニシラスデハナイヅ

餘材つれもなくの注わろし。上の句は序にて。四の句のそこは。序よりは。底とつゞきたり。つれもなくは。氷の下をかよふ。故に。上へはさも見えぬよしあり。此詞は序のうへのとのみにて。歌の意にはあづからず。

六帖にはおきゐる船のさむければとありしみつゝともは染つくなり

さゝの葉にれく初霜の夜を寒みはつくとも色に出めや

○笹ノ葉ヘフッタ霜ガ。夜ノ寒サニ。シミツクヤウニ。ワシガ戀心モ。シミツクヤウニハ思フト云テモ。色ニダサウカイ。ドノヤウニアッテモ色ニハダスマイデハナイ

音にだには音にもといふが如しだにといふ詞をかろ〳〵意得べし

山しなの音羽の山のれとにだにひとのしるべくわがこひめかも　よみ人しらず

○ナンボ戀シウ思ウトテモ目音ニモ人ノシルヤウナフリヲセウカ。マアソノキヅカヒハナイヅイナ

此歌ある人あふみのうねへのとなん申す

しら川はいにしへは鴨川の上をいへり

万葉にいきのをに思へば〳〵るし玉の緒のたえてみだれなしらばしるとも

きよばらのふかやぶ

みつじほの流れひる間を逢がたみみるめの浦によるをこうまて

○日ふの札壹ノ間々カ逢ガタサニ圖夜ルチョウシハ待ツワイ

平貞文

白川のしらずともいはじ底きよみ流てよ〳〵にすまんと思へば

○人ガ問フタラ㊀シラヌトモイハウナレドサウハ云マイ。オレヤ㊂眞質ナ忍底ヂヤカラハ。㊃イツマデモ米長ウツレソハウト思フ料簡ナレバサスレヤソノヤウニナニモ人ニカクスコトデハナイワサテ

とものり

しらたふのみこふれぼくるし玉のをのたにてみだれん人なとがめぞ

山たちばなは髪うぎの時山すげにうふる草なり今はやぶからしとよぶものなり

○ナイセウデバツカリ思フテ居レバキツウシユツナイコモウシモイツソウチダシテ㊁たえてミダレウ。ソシタラ人ノ目ニカヽルデアラウカ。必ズタレモトガメテ。下サルナヤ

我戀を忍びかねてばあし引の山たちばなの色に出ぬべし

○ソシガ此思ヒヲ。今マデハマアドウヤラカウヤラ。忍ビカクシテ居ルガ。コレカラモウドウモコタヘラレヌヤウニナツタナラバ。㊂圖色ニデヽ人ノ目ニモカヽルヤウニナルデアラウト思ハル

よみ人しらず

大かたは我名もみなとこぎ出なんよをうみべたに見るめすくなし

○磯バタハ海松メガスクナサニ。舟ヲ淺カラ沖ヘズツトコギ出シテ。存分ニミルメヲ苅ルヤウニ。ワシガ中モ。大ガイナコトナラ。モウ名ノ立ツ

枕は耳ちかきものゆゑに用といふとにていふ歌これらはいづれにもあれ大方戀をすれば枕はもはら知るべきものといふべし

ねにあらはれてと言へる上は序なり

フニカマハズニ。世間ヘハツトウチ出シテシマハウ。隱シ忍ブ中ハ。思フヤウニ度々モアハレヌガ。イカニシテモウイコトヂヤホドニ餘材打聞。よをうみの說わろし。世は男女の中をいへるにて。忍ぶ中をうく思ふよしあり。又餘材船の名のさだ用あし。

平貞文

枕より又ぞ人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな

○ワシガ戀ヲバ。枕ハトウカラモ知ッテヰタフモアラウガ。枕ヨリ外ニハ又ト知ル人モナカッタニ。涙ナドウモエセキトメイデ。ツイトリハヅシテ。モラシテノケタワイ。サテモ〳〵ツライフチシタフカナ。

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべくなり

この注例のとらず六帖に松の歌に入て涙こす磯のうなれ松とありて作者人まろとあるせりともにあやまれり

○風ガ吹テ涙ノウチヨセル岸ノ松ハ根ガアラハレルモノヂヤガ。ワシガ戀モソンナモノカシテ。ドウヤラチニアラハレテ。泣キサウニ思ハルヽ。ドウモコタエラレチバセ。カウ云フタバカリデハ。聞エマガイ。聲ヲアゲテ泣ケフチ歌デハチニ顯レルト云ニヨッテ。

此歌はある人のいはくかきのもとの人まろなり

池よすむ名をくゝし鳥の水を淺みかくるとすれど顯れにけり

○池ニ住デアル鴛ノ。底ヘカクレルト思ヘド。水ガ淺サニ。アラハレテ見エルヤウニワシガ戀モ。ウキ名ノタッチ惜ウ思フテ。隨分トカクシ忍ブヤウニスルケレド。ゼヒモナイフハ人ガ知タワイ

あふてはたまのをばかりなる名のたつにより野の川の瀧つせのごと

ことなしぶさはことなしぶりにて事も無げにいひなすなり

六帖に君が名もわが名もおなじとて霜の際に入たり
野にも山にもとは世にあまねくたつと云

こゝろにてかすみよりつゞけたり

空にたつらんはなき名のたつにはあらずもとよりろのことのありて名のたか〜立をいへりなき名と云説はあしゝ此篇次なき名にあらず

○玉チツナグ緒ハズンド細イヒヨワイワヅカナ。物ヂヤガ。ワシガ中モ逢フコトハテウドワノ玉ノ緒クラヰノワヅカナフデ。ソシテ名ノタツフハ吉野川ノ瀧ノ音ノ高イグラヰデ。ソレハ〜ヤカマシヒフヂヤワイノ

むく鳥のたちにし我名今さらにとなしぶともまるしあらめや

○曰一トクヒ立ツ名ハ。モウドウモゼヒガナイ。今サラワシヤソンナフハナイト云ヒワケシタトテモ。ヤクニタヽウカイ。ナンノヤクニタヽヌフヂヤ

ことあしふの注。打聞よろし。餘材わろし。

君により我名は花にはる霞野にも山にも立みちにけり

○君ユエニワシガウキ名ハテウド野ヤ山ノ花ニ霞ガイチメンニタツヤウコトコカラドコマデ。知ラヌ人モナイヤウニナツタワイノ。花ニ霞ノタツハツライモノヂヤガ。ウキ名ノ立ツタモ同ジフデ。サテモツライフヂヤ

花にといへる意の説。餘材打聞ともにわろし。

伊勢

まるといへば枕だにせでねし物をちりならぬ名の空に立らん

○ナンボカクス。戀デモ枕ハヨウ知ルト云フヂヤユヨツテ。ワシヤ枕サヘセズニ。寐タモノヂ。誰ガマア知テ。ウキ名ガハツト高ウ立ツタフヂヤラ。塵コソ空ヘハツトタツモノナレ。塵テモナイウキ名ガサマア

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十三終

頭書　かつ見るといはん序のみかつ見るとはかつぱつあひ見る人なり
あさかの沼は安積郡にありあさか山も同所なりといへり

古今和歌集遠鏡卷之十四

戀歌四

題しらず　　よみ人しらず

みちのくの淺積の沼の花がつみかつ見る人に戀やわたらん

○上カツ〳〵ニチヨツトカウ逢タバカリノ人ヲ。コレカライツマデモ戀シウ思ウテ月日ヲタテルヿデアラウカイ清

逢見ずば戀しきともなからまし音にぞ人を聞べかりける

○一度モ逢タヿガナクバ此ノヤウニ戀シイヿモアルマイ。アフタヿガナクバタヽヨソノコトニ聞テ居ルバカリデサアラウニト思ハルヽ

つらゆき

上はなか〳〵にといはん序なり
いろのかみふるは大和の山邊郡なり中道はうこの中にあ為道なり

いろのかみふるの中道なか〳〵に見ずは戀しとをもはましやは

○目ナマナカニ一度モ逢タフガナクバ此ノヤウニ戀シイトハ思モハウカイコノヤウニハ思フマイニ

この歌友則集に見えたり

藤原のたゞゆき

君といへば見まれ見ずまれふじのねのめづらしけなくもゆる我戀

○富士ノ山ノモエルノハジヤウヂウノフデ。メヅラシイフモナイガ。ワレモオマヘノフトサベイヘバ。逢テモアハイデモ。イツデモフジノ山ノヤウニ戀ノ思ヒガモエマス

女の歌にはいと用意ありてやさしきなり朝とにといふにて鏡といはでもとゝのりつくせり

伊勢

夢にだに見ゆとはみねじ朝な〳〵わがおもかげにはづる身なれば

○ワシヤモウ思フ人ノ夢ニモ見エルトハ見ラレマイヅ。朝々鏡ヲ見ルニモキツウヤツレタオモカケデ。ハヅカシイ身ヂヤニヨツテヤ

よみ人しらず

石間とよむべからずいはまとよむが古語なり

石間ゆく水の白ら波立かへりかくころは見めあかずもあるかな

○目ドウヅ又ヒツカヘシテ來テ此通リニヤアハウワイ。サテモ〳〵マアノコリオホイフカナ

上は序なり見るめにわが思ふ人にあひ見るをよせてあ〳〵までにもがなと願ふなり

いせのあまの朝な夕なにかづくてふ見るめに人をあくよしも哉

○目ドウヅ〳〵思フ人ニ存分ニハラ一ツパイ。逢ハレルヤウニシタイ朝ゑ夕ゑい。朝食の菜。夕食の菜ゑり。魚類をもゑといふ。菜と同意あり。此ノ歌ゑどの朝ゑ夕ゑを。たゞ朝夕のことと見るはひがとぞ

とものり

わりなきはとわりなきものにおもふとなり

春霞たなびくら花見れどてもかぬ君にもあるかな

○カスミノタナビイテアル山ノ櫻花ヲ見ルヤウデ。見テモ〳〵逢テモ〳〵サテモマアアカヌ君デヤコトカナ

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

ふかやぶ

○心ト云モノハ。ムリナコトヲ思フモノヂヤトサ思ハレル。カウシテ逢テ居ナガラモヤツハリ戀シイワイ。逢テ居ナガラ戀シカラウハズカイ。逢テ居テハ。戀シカラウハズハナイニ

かれはてん後をぼ志らで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

凡河内みつね

○夏シゲル草モ。冬ハノコラズ枯レルモノヂヤガ。ワシガ思フ人モ。今コソアレ。後ニハカレテ。遠ノイテシマウデアラウニ。サウ云フコトヲ白ガテンセズニサテモ〳〵。夏草ノヤウニ深フ思ハレルコトカナ

よみ人志らず

飛鳥川ふちは瀬になる世なりともおもひろめてん人はわすれじ

○アスカ川ハ淵瀬ガヨウカハルト云フコトデ。世間ノ人ノ心モソンナ物ヂヤト云フコトヂヤガ。タトヒソノヤウナ世ノ中ヂヤトテモ。ワシハ一トタビ思ヒソメテアラウ人ヲバイツマデモ。忘レハスマイ

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらん

○ソウタイ木デモ草デモ。秋ハ色ガカハルモノヂヤガ。秋ヲコシテモ。色

ある人のいはゝ下にあるきのふのふちはけふの瀬になると云をとれるなりとりめてんはうめたちんのつゞめなり

さむしろは延喜式にも見えて狭席はせまくみじかきむしろなりされどもかくよむはろれまでもなくさは發語にてたゞむしろのことに心得べし

ノカハラヌモノハ。ウシガオマヘヲ思ウト云此ノ詞バカリデカナアラウ。何ハカハルト云テモ。此フシガ詞バツカリハカハリハセヌソエ

打聞わろし

題しらず

さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらん宇治の
はし姫

○今夜モ帶ヲトイテ。フトンノ上ヘキルモノヽ片一方ヲシキテ。我ヲ待ヲ居ルデカナアラウ。宇治ノ橋姫ガッ。打聞はし姫の詠いかゞ

又ハうぢのたまひめ

君やこん我やゆかんのいさよひに眞木の板戸もさゝずねにけり

○君ガクルデアラウカ。ウシガ行ウカト。シバラク見合セテ居タデ。戸モサヽズニチタワイ

あり明月は十五夜より後をいへどかやたに待わびたらんハ廿日より後の月なるべし

今こんといひしばかりに長月のあり明の月を待いでつる哉

うせいほうし

○オッヽケソレヘ參ラウト云テオコシタバッカリニ。此ノ九月ノ末ノ夜ノ長イニ。サテマッホドニ〳〵。オソウ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ。約束モセナンダ有明ノ月サヘ待チダシタニ。ソレニサ待ツ人ハサテモサテモ來ヌコカナ。コレハマアドウシタコヅ

万葉にわが宿に梅さきたりとつけやればこちふに似たりちりぬともよし

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふにたり待ずしもあらず

よみ人しらず

○今夜ハキッッ月ガヨウゴザル月ガヨウゴザルト人ノ所ヘシラセテヤッタラ。ソレデハチトゴザレト云テヤルモ同ジヤウナモノヂヤ。ドレヤシラセテヤラウ。オレモアマリヨイ月ヂヤニヨッテ。モシワセモセウカト

一説にこむらさきハ濃紫なり

和名鈔に髪を毛度山比といへれば即髪をもて元を結をもいひ又糸もてゆふをもいふなり

マタヌデモナイニ

月夜よしよゝしい。月夜よし月夜にしと重ねたる詞ゐるを。はぶきたるものあり。東屋のまやのと云るも。同じ格にて。東屋の東屋のとかさねたり。こてふは。こよといふあり。こんといふにはあらず。こよをごといふは常あり。こんをことのみいへる例あし。すべて此ノ歌。諸注みな認キ得ず

君こずは清ねやへもいらじこむらさきわが本ゆひに霜はおくとも

○君ガコズハイツマデモ閨ヘモハイルマイ。カウシテ外ニ立ッテヽ。髪ヘ霜ガオクト云テモイトヒハセヌ。ヤッハリコヽデ待テ居ヤウ

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風を待ど君をこうまて

○宮城野ノ本アラノ小萩ノ露ガ重サニ風ノフイテクルノヲ待ッヤウニサ。ワシハ君ヲマッワイノ。

生たるあり。さる故にあびきやすくて。とに露のおもきよしあり。こ萩のこゝ。小菅に柴あゞの類の小あり。木萩にはあらず。又小にはつけていふ詞のみにて。ちひさきをいふにもあらず。

本あらは。本だちのしげからず。あらゝ

あなこひし今も見てしが山がつのかきほに咲るやまとなでしこ

○アヽ戀シイ。ドウゾ今モ逢タイモノヂヤ。山中ノ家ノ垣ニヨウ咲テアルアノヤマトナデシコノヤウナカアイラシイソノコニサ

津の國のなには思はず山しろのとべ清に逢見んとをのみこそ

○曰何ヲモホカノヲハ思ハセヌ。タヾ逢タイ〳〵ト。ソレバッカリヲ三シヤウギウワシヤ思フテ居ルワイ。

とはにゝ。あひ見んへかゝれるにゝあらず。といに思ふといふ意あり。上の思はずといふを下へひゞかとハゝとこしなへの暑にて常といふこゝろなり

上は序にてあきしまハ大和の地名なりあきしまの大和といひて日本の惣名にいひなして唐とはつゞけたり

あきしまの大和とつゞくるよし〳〵はし〳〵石上松淑宣に見えたり

上は序なり大河の邊は地名にあらずいづこにても大河のほとりをいふなり

こゝろのうちとは心のうちのうちなり

せて。思ふといふことをしらせたり。

あきしまのやまとにはあらぬから衣ころもへずして逢よしもがな・

つらゆき

○上ドウヅアヒナシニ又アウヤウニシタイフヂヤ

ふかやぶ

戀しとは誰なづけゝんことならんあぬとぞたゞにいふべかりける

○戀シイナド、云名ハ。タレガツケタフヂヤヤラ。ソンナマハリドホイ。名ヲイハウヨリハ。ナニカナシニ。死ヌルトナスグニ云タガヨイワイ。キツウ戀シウ思フトキニハ實ニ死ヌルヤウナワサテ

よみ人あらず

みよし野の大川のべの藤なみのなみに思はゞわがこひめやは

○上一トウリニ思フフナラ。ワシガ此ノヤウニコヒシタハウカイ。一トトウリノフデハナイワイナ

かくこひん物とはわれも思ひにきこゝろのうらぞまさしかりける

○サイシヨカラサ。後ニハコノヤウニ戀シカラウモノヂヤトハ。ワシモ思フタコトヂヤ。サイシヨノワシガ心ノウラナヒガヨウ合タワイナ

天の原ふみとゞろかしなる神もおもふなかをばさくるものかは

○神ナリト云フモノハ。ヨニオソロシイ。何ンデモタマラヌ。ケシカラヌイキホヒナモノヂヤケレド。ソレデモ人ノ思ヒアウタ中ヲバトホノケルモノカイ。ソンナカミナリサヘトホノケハセヌフナレバ。タトヒ何フカ。アツタトテモ。ノツコトデハナイワシヤ

ひき野は河内國日置と書て今の俗にへきといふにありてれなるへし梓弓はひくと云かけし冠辭なりつゞらはかづらなり

この注とらず
夏野の草のとくしげく人のいひさわぐといふなり

梓弓ひきの〳〵つゞら末つひにわがおもふ人にてのまげ〳〵ん

○目末テハドウヅ。ミガ此ノヤウニ思フ人ニ。名ガ立テ。イロ〳〵トウハサガシゲウナルデアラウ

此うたはある人あめのみかどのあふみのたねへに給ひけるとなん申す

夏引の手ひきの糸をくりかへしてと思ふな

○タトヒ世間ノウハサハドノヤウニシゲウゴザリマセウトモ。目イツマデモワタシヲ絶ウトハ。思召テ下サリマスナくりかへしとは長くつゞきてたえきれざる意にいへるなり。

此歌はかへしにとよみて奉りけるとなん

里人のとは夏野のまげくともかれゆく君にあはざらめやは

○人ノウハサヲハドカツテ。君ハトホノイテイクカ。在所デノウワサハ。タトヒ夏ノ野ノ草ホドシゲクトモ。オレガ逢ズニ居ヤウカ。コレカラトテモアハズニハオクマイ。餘材の說くたくし打聞きこえず、

藤原ノ敏行ノ朝臣の家なりける女をあひ志りてふみつかはせりけるをばにいまゝうでく雨のふりけるをなん見わづらひ侍るといへりけるをきゝて女にかはりてよめりける

在原ノ業平ノ朝臣

かずかずに思ひおもはずとひかたみ身をしる雨はふりぞまされる

○ワシガ一ツノシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ。ソコノホドハドウモキヽタシガタサニコヨヒノ雨テソレヲ考ヘテ見テ。ソレデワ

シガ身ノ仕合ヲ不仕合ヲモシレルヂヤガ。ソノ雨ハ。此ノヤウニ段々ト大ブリニナリマスコレデワシガ不仕合ヲモシレタヂヤワイナ。コノ雨デワシガ身ノ仕合不仕合ヲ知ルト申スワケハ。マアタヾ今ノ御ゐノ通リナレバ此ノ雨ガ止ンダナラ御出ガアラウシ。ヤツハリフツタラ御出ハアルマイヂヤ。スレヤコノ雨ハワシガ身ノ仕合不仕合ノシレル雨ヂヤワサテ

かず〳〵にといふ詞。諸説みなあたらず。これは俗言に深切にといふにあたれり。そもまづ數ふとは物の多きをいふ言なり。さて古歌に。「わが戀はよむともつきじ云々おど。戀の數かはきよしをつねによみ。又思ひのしげきよしをいふ。多きしげきは。戀る心の深く切なるをいへり。これにてかず〳〵にをもさとるべし。こゝの外にも。此ノ詞をよめる古歌ども。みなこの意なり。考へあわせて知るべし。

ある女のなりひらの朝臣をところさだめずありきすと思ひてよみてつかはしける

大ぬさのひくてあまたなりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

よみ人しらず

○秡ノ時ニ大麻ヲアマタノ人ガ手ヲ手ニ引ヤウニ。オマヘハ近イコロハ方方カラヒツハル所ガ多ウナツタナレバ思ヒハスルケレドモ。ワシハドウモオマヘヲ頼ミニハサエイタサヌワイナ

かへし

おほぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふ物を

なりひらの朝臣

○サアワシハソノヤウニ引ヤウニ人ガ多イ大ヌサデヤト。名ニコソタラレタレ。ソノ大ヌサハ川ヘ流レテハユクケレド。ドコトデハ流レテヨル所ノ瀬ハアルト云フノニ。アンマリソノヤウニ大ヌサヂヤ〳〵ト云テ下サルナ

能宣集にみそぎする川の淵せにひゝあみを大ぬさなりと人や見るらん

万葉にしがの浜の鹽やくけふり風をいたみたちはのほうで山にたな引々上はまた〳〵是をとりたるなり又躬恒集にもしほやく浜のたく火のけふりこそ思はぬ方に立のぼるらし是はこの歌の下をとりたるなり心もまた〳〵同じ

夜がれ新撰万葉に夜避ともかけり

ワシヂヤトテ末デハトウデヨル所ガナウテハ。ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ

題しらず　よみ人しらず

須磨のあまの鹽やくけふり風をいたみ思はぬ方にたな引にけり

○スマノ浦ノアマノ鹽ヲヤク烟ガ風ノツヨサニワキノ方ヘナビイテイクヤウニ。ワシガ思フ人モ。思ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテイタワイノ

玉かづらはふ木あまたになりぬれば たえぬ心のうれしげもなく

○オマハテウド。カヅラノアノ木ヘモ此ノ木ヘモハヒカヽルヤウニ。アチコチト御通ヒナサル所ガ方〳〵ニデケタレバ。ワシガ方ヲタヱハナサライデモ。ソノタヱヌ御心ガナンノウレシイコトモナイ

誰里に夜がれをしてかほと〻ぎすたゞこ〻もとにねたるこゑする

○夜中ニアレ時鳥ガツイコヽデ鳴ク聲ガスル。イツモトマル里ハドコノ里カシラヌガソノ里ヲバ今夜ハトマルノヲ一夜蹴シテ。メヅラシイコヽノ。庭デ鳴タトミエル。アソコデチテサテナク聲デヤ

これはたゞ時鳥の歌なるを。こゝに入れたるは誤なるべし。戀のたとへとしては。ねたる聲するといへると聞えがたし。然るを戀の意に注したるは。をひでとあり。菅家萬葉には夏の歌とし。六帖にもほと〻ぎすの歌とせり。

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

○イヤモウ人ト云モノハ。口バッカリナモノヂヤ。ウツリヤスイ心ハ。

口トハキツイヲヒデサ

いつはりのなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

つき草は俗につゆ草ともいふこの花をもて紙にそめ又それをうつしてものを染ればうつし花といふなり

ちるをもかはるをも
うつろふと云うちに
秋風とあるにはちる
方なるべし然れば心
のわれによらずうつ
ろふにたとへたり

○誰デモ口デハ嬉シイヲ云テクレルケレド。皆ウソデ。チカラ頼ミニ
バナラヌカ。ウソ云ッコトノ無イ世ノ中デアラウモノ。人ノ云テクレ
ルヲガ。ドレホドウレシイコトデアラウゾ

いつはりと思ふ物から今さらに誰まをかは我はたのまん

○ウソヂヤガトハ思ヒナガラモコレマデ。頼ミニ思フテ居ル人ノ云フヲ
ナレヤウシヤヤツハリソレヲ頼ミニ思フテ居ルワイノ。タトヒ外ニマ
コトナ人ガアッタトテモ。今サラ心ヲウツシテ。誰ヲタノミニハセウ
ヂイノ。ウシヤトツトサウ云ハナイ

秋風に山のこのはのうつろへば人のこゝろもいかゞとぞおもふ

素性法師

○此ノゴロノ秋ノ風ニ山ノ木ノ葉ノ色ガカハッテチッテイクヲ見レバ。
人ノ心モドウアラウゾガハリハスマイカトサキヅカヒニ思ハル

六帖にはならんとす
らんとあり

うつせみは現身なり
世の人といふ冠辭な
り

寛平ノ御時きさいの宮の歌合のうた

ともののり

蟬のこゑ聞はかなしなつころもうすくや人のならんとおもへば

○蟬ノナク聲ヲキキケバ。モウオッツケ秋ガ近イト思ヘバ頼ミニ思フ人ノ
心モ秋風ガタッテ。心ザシガ。此ノ節ノ夏衣ノヤウニウスウナルデア
ラウカト。思フノテカナシイワイノ。餘材あまりくだくし。夏衣と
いへるは。蟬の羽衣の縁をかねて。たゞうすくといはん料の枕詞のみ
なり。打聞說二の句にかゝはず。

題しらず　よみ人しらず

うつせみのよの人ごとのしげゝれば わすれぬべくなり

そをたにはそれをたになり

○曰世間ノ人ノウワサガシゲヽレバ。ワレヲ忘レハセヌナガラ。オノヅカラトホノクノデアラウト思ハルヽ。又人ヲワスレハセヌナガラ。オノヅカラトホノクノデアラウト思ハルヽ

あかでこう思はん中ハはなれなめうをだに後のわすれがたみに

○思フ中ナラ。タガヒニアキノコヌウチニ。ハナレテシマハウヿヂヤ。ドウシテモ久シウナレバ。アキノクルナラヒナレバ。セメテ今此タガヒニアカヌトコロヲナリに後〳〵ノ思ヒダシグサエシテ。ハヤアキガキテカラハナレテハ。何ンニモ思ヒダシグサモナイワサテ。餘材わすれがたみの説わろし

わすれなんと思ふ心のつくからにありしよりげにまつぞかなしき

○コヲノ思フヤウニモナイ人ヲ思フテ此ヤウニ心ヲ苦シメウヨリハ。ワスレテシマハウゾト思ヘバ。又トウヤラ心ボソウナッテ。今マデヨリハナホキツウカナシイサウ思フ心ガツクカラシテ。ハヤマア。此ヤウニカナシウテハ。トテモワスレテシマハルヽヿデハナイ。千秋云。ともとは。二の句へつゞくべし。

わすれなん我をうらむなほどゞさす人の秋にはあはんともせず

○ワスレテシマウト思フガ必ズオレヲ恨ムナヨ。時鳥ノ秋ニナラヌサキニ早ウドコヘカ。インデシマウヤウニ。オレモ人ノ秋風ニハアハウトハ思ハヌ。千秋云。二の句にてよみ切て。三の句は下へつゞけてよむべし。

たゞずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはん

○タヘズ流レテツヒニヨドンダヿノナイ。此ノ飛鳥川ノヨドンダヤウニ。オレガモシタマ〳〵サシツカヘテモアッテ。通ハヌヿガアッタラ。ナンゾ心ニシナノアルヤウニカノ人ガ思ッテカナアラウ

この歌兼輔集に全く女の歌なりかへしは「わすれなばたれかは人をうらむべきうきにおくれてしるはわれかは」

万葉に「人ごとをしげみこちたみあはざりきこゝろあるごとおもふなわが夫」又葛の絶ぬつかひのかよはねばことしもあるごとおもひつるかも

ふかきは淀のよせなり

そこひは海のそこ川の底など下のかぎりをのみ云にあらず上下四方いづれにも遠くふかきをいへり

四の句。一本に心あるとやとあるにつきて。田中道まろが。心あるとやの。こもじのおちたるならんといへる。まことにさることなり。此ノ歌ふるきすがたなれば必まかるべし萬葉の歌の例みな然かあり。あるとやにては。語とゝのはず。

此ノ歌ある人のいはくあかとみのあつま人が歌なり

淀川のよどむと人の見るらめどながれてふかき心あるものを

○此間ワシガエイカヌヲ。川ノヨドンダヤウニ。ナンヅトゞコホリガアルト思フテアラウケレドモ。ワシヤ末長ウイツマデモト思フ深イ心ヂヤモノナンノトゞコホリガアロウイ

うこひなき淵やはさわぐ山川のあさきせにこそあだ涙はたて

素性法師

○山ノ川ノ淺イ瀬コソザワ〳〵ト涙ハタツモノナレ。底ノナイヤウナ深イ淵ガサワグモノカ。深イ淵ハケックサワギハセヌ。テウドソンナモノデシンジツニ深ウ思フ人ハ口ヘダシテ何ントモイヒハセヌ。シンジツラシウナンノカノト云ノハソレヤケック心ノ淺イアダ涙ヂヤ

よみ人しらず

くれなゐのはつ花ぞめの色ふかく思ひし心われわすれめや

○三サイショカラ深ウ思ヒソメタ心ヲ。ドンナ〻ガアツタトテワスレウカワシヤ。イツマデモ忘レルコトデハナイ

みちのくのしのぶもぢすり誰ゆゑにみだれんと思ふ我ならなくに

かはらの左大臣

○三タレユエニ外ヘ心ヲチラサウゾ。オマヘヨリ外ニ心ヲチラスワシ

紅のはつ花ぞめさいはりに衣はすらんともいふに同じくすべて初花をまゝとする中に紅は房のあまたある中にその最中なるがはやくさきてよき色なるゆゑにはつ花ぞめの色ふかくと云なり

ヂヤナイヅエ。まのぶもじずりの説。顕注よろし。打聞わろし

よみ人まらず

思ふよりいかにせよとか秋かぜになびく淺茅の色とになる

○ワシハコレホドニ深ウ思フニマダ此ウヘヲドウセイト云フデ圖人ハ心ガハリノシタフヅ。コレホドニ思フ此ノウヘハモウドウモ。シヤウガナイ

ちゞのいろにうつろふらめど濁まらなくに心し秋の紅葉ならねば

○人ノ心ハアチヤコチヤイロ〳〵ニウツルデアラウケレド。心ハ紅葉ノヤウニ色ノ見エルモノデハナケレバ。ウツロウノガシレヌ

餘材はじめの説わろし。打聞よろし。

小野ノ小町

此歌は人の我を怨みんといふことをいひおこせしか又ハ人ゴトに聞てよめるなるべし

あまのすむ里のまるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

○海邊ノアマノスム里ノ案内者ニコソ浦ヲ見ヤウトハ云ハウハズノフナレ。ワシハソンナ。浦ノ案内者デモナイニドウ云フデ。ウラミヲ云ハウ。ウラミヲ。云ハウバッカリ。ヒタモノ人ノイフヲヤラ

まもつけのをむねくもり日の影としなれる我なればめにこそ見へね身をばはなれず

○ソラノクモッタ日ニハ。人ノ影ノアッテモ。見エヌヤウナモノデソレト目ニ見エコソセヲ。ワシハ戀ニヤセホソッテ。此ヤウニ影ノヤウニナルホド思フフナレバ人ノ影ノ身ヲハナレヌヤウニ。心ハシヤウヂウ。思フ人ノ身ヲハナレハセヌ

つらゆき

この歌ハ人の方よりわかこゝろのかわれるやうにいひおこせし時のこたへなるべし

志かもせねはさもせぬなり

これより下五とは立かへりて戀る心なり

かげろふはそれかあらぬかといはん冠なり

色もなき心を人にうめじよりうつろはんとはおもほらなくに

○色ノアルモノナレバコソ。ウツロウテカハリモセウケレ。人ノ心ハ色ハナイモノナレバソノ色モナイウシガ心ガ。カノ人ニシミコンダカラハ。イツマデモカハラウトハ思ハレヌ

よみ人志らず

めづらしき人を見んとや志かもせぬ我下しものとけわたるらん

○久シウアハヌメヅラシイ人ニアハウトテヤラ。五ちん サウシモセヌノニ。ウシガ下紐ガコノゴロハ度〻ヨウトケル○千秋云。譯にサウシモセヌノニとあるは。即チ下紐をときもせぬにといふとなり。

かげろふのうれりあらぬかはる雨のふる人なれば袖ぞぬれける

○日サウカサウデハナイカ。モウ見ウスレタクライチヤ。サテモ〳〵三

大船にふなたなうちてなど万葉によめり小舟にはその棚無きなり

この歌後撰にみやづかへし侍りける女ほどひさし〳〵ありて物いはんといひ侍りけ

久シウアハナソダ人ヲ見レバ。イゼンノ了ガ思ヒダサレテ。涙ガナコボレル

四の句。六帖また歌昭本に。ふる人見ればとあるぞよろしき○千秋云。此ノ集のなれば。みをなにうつし誤れるなり。みとなと似たり

ほりえこぐたなゝしを舟こぎかへり同じ人にや戀渡りなん

○堀江ヲ往來スル小船ノ。イク度モ同ジ川筋ヲノボリ下リスルヤウニ。ワシハヤヘ方ノ同ジ人ヲ。又タチモドリ〳〵。此ヤウニイツマデコヒシタウコヤラ

清同

わたつみとあれにしとこを今さらにはらはゞ袖や沫とうきなん

○ワシガ床ハ。久シウウチタエテ思フ人ト逢テ寐タコトモナイコエ。カナ

るにおそくまかりければ批把の左大臣「よひのまにはやなくさめよいその上ふりにし床も打はらふべくそのかへしとて今の歌ありいせの集も同じ

シサニ涙ハ海ノヤウデ。ソノ海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ジヤニ。久シフリテ又今サラ。ソノ人ニ逢フギヤトテ。ソノ床ノツモツタ塵ヲ。袖テハラウタナラ海ヘ洙ノウクヤウニソシガ袖ガ涙ニウクデアラウ

いにしへに猶立かへる心ゝなこひしきをにものわすれせで

つらゆき 清

○今デモヤツハリ昔ニ立カヘツテ。マヘ方ノ人ガ戀シイ。サテモ〳〵物ワスレセヌ心カナ。ドウヅ此ノヤウニ戀シイヿニ物ワスレヲシテ。マヘ方ノ人ヲバドウヅ忘レテシマハイデ

人をおのびにあひおりてあひがたくありければうの家のあたりをまかりけるをりに雁のなくをきゝてよみてつかはしける

大とものくろぬし

思ひいでゝ戀しきときは初かりの鳴てわたると人おるらめや

○思ヒダシテ戀シイキハ。アノ雁ノ鳴テワタルヤウニ。我モ此ノトホリニ此門ヲ泣テトホルト云ヿヲ。コノ家ノ内ノ思フ人ハ知ウカヤ。カウヂヤトハシリハスマイ

右のおほいまうち君すなずなりにければかのむかしおこせたりけるふみどもをとりあつめてかへすとてよみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今はかへしてん我身ふるればおきどころなし

○コレマデイロ〳〵ト末タノモシサウニ。オウシヤツテ下サレタ御文ヒ

住すなりにけるとはいにしへは女の方へむこたるものゝいきて住しなり

ある人云鳴てわたる詞海に見えて雁の家のあたりをまへわたりする心なり

近院は春日の北烏丸東號松殿右大臣能有家也この右大臣は文德天皇の御子にて源朝臣なり

おのがものからはおのが物ながらなり仁德紀に諺曰有海人耶因已物以泣云々

モ。モウ御モドシヤシマセウゾ。ワタシガ身ガコノヤウニアカレテシマウタレバ。今デハモウ此ヤウナ御文ナドハ。此ノ方ニハオキドコガゴザリマセヌ

ふるればは。ふるさるればあり。ふりぬればとは異なり。

近院ノ右のおほいまうち君

かへし

今はとてかへすとのはひろひおきておのがものから形見とやみん

○モウハト云テカヘシオコサレタ此ノ文ヲ。ヒロウテトツテオイテ。モト自分ノ物ナガラモソナタノ形見ヂヤト。思フテ見マセウカイ

題しらず　よるかの朝臣

玉ぼこの道は常にもまどはなん人がとふとも我かと思はん

○オマヘハ今デハ。毎夜御通ヒナサル所ガ外ニアルヂヤガ。タマ〳〵今夜コレヘ御出下サレタハ。定メテ道ヲトリヂガヘナサツタデアラウヂヤケレ尼コノウヘトテモ。イツデモコヨヒノヤウニドウゾ道ヲトリチカヘテ御出下サレバヨゴザリマスソシタラ余ノ人ノ所ヘ御出ナサルノデモ。實ニワタシガ所ヘ御出下サレタノカト思ヒマセウワサテ

よみ人しらず

さてといはゞねてもゆかなんしひてゆく駒の足をれまへのたな橋

○マアシバラクトヤスカラニハコヨヒハ。トマツテモインデ下サレカシ。ソレニナンゾヤトリイソイデ。トツカハトイナシヤルハサテモ〳〵キコエマセヌ。カウシテフリモギツテイナシヤルヘアノオ人ノ馬ノ足ヲツマヅカシテコケサシテクレイ門ノ前ナ溝ノ橋ヨコリヤ。○千秋云。譯のはてに。コリヤといふ詞をろへられたるをもしろし。さる勢ある歌なり。さて此ノ歌俳諧の類なり。

中納言源のぼるの朝臣のあふみのすけに侍ける

棚橋ハ人の家の前の小川などに板にて棚のかたちに柱立てわたしたる小ばしなり

昇の朝臣ハ河原ノ左大臣の男埴の弟なり

閑院ハ源宗于朝臣の女なり

ときによみてやれりける　閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなく〳〵もみめ

○ワシガ身モ。相坂ノ關ニハナシデ。アル庭鳥ナラバ。ナキ〳〵モセメテハオマヘノ近江ヘ御通ヒナサルノチナリニ見ヤウケレ。ワシハサウシテ御往來ナサルノチ見ルヿサヘナラヌガカナシイワイノ

題しらず　伊勢

故郷にあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらん

○故郷ユソアレテ見ユルモノナレ。ワシガ思フ人ノ心ハ。故郷デハナケレドモワシガタメニ此ノヤウニアレテウト〳〵シウナツタハドウ。云フヤラ

餘材打聞わろし。見ゆといへるは古里のあれて見ゆるかたにいへる詞

和名鈔に防己一名解離和名あをつゞらと見し延喜式にも青つゞらと見えたり六帖にハたゞねくれどもあふよしもなしとて作者なし

六帖に大ぞらにハかよふ人もきこえぬをものおもふことになぞといはるゝ

あり人のこゝろの方へかけては見べからず。

山がつのかきほにはへる青つゞら人にくれどもとゞまるもなし　寵

○思フ人ノ所カラ此ノアタリヘ。人ハ度々來ルケレドモ。ワシガ方ヘト云テハチカラコトツテモナイ。上句はたゞ。くるの序なり

大ぞらハ戀しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらるらん　さかねのひとざね

○空ハ。戀シイ人ノ形見カイ。カタミデモナンデモナイニ。ドウ云コトデ戀シフ思フタビゴトニ。コノヤウニナガ、ラルヿハヤラ

あふまでのかたみも我ゝ何せんに見ても心のなぐさまず　よみ人しらず

源氏あかしの巻に御使なべてならぬ玉もかつけたりとかけるもところがらにより て玉藻によき裳をよせていへるなり

なくに

○又アフマデノ形見ノモノモ。ナニヽゼウゾ。ヤクニタヽヌ物ヂヤ。コレヲ見デモオレハ。戀シウ思フ心ガ。チエカラヤスマルヿモナイ

おやのまもりける人のむすめにいとまのびにあひて物らひけるあひだにおやのよぶといひけれ ばいそぎかへるとてもをなんぬぎおきていりにけるうの後もをかへすとてよめる

おきかぜ

あふまでのかたみとてこそとゞめけめ涙にうかふもくづなりけり

○コノ裳ヲノコシテオカシヤツタハ。定メテマタ逢フマデノ形見ニ見ヨトイフ御心デコソゴザラウガ。コレヲ見レバ。オマヘノヿガ思ヒダサレテ。涙ガナガレテヲ。海ノ涙ニウク藻屑ノヤウニ涙ニウク裳ヂヤワ

イノ

題志らず

かたみこそ今ハあたなれ（清）これなくハ忘るゝ時もあらまじ物を

よみ人志らず

○形見ハヲ。ケツク今デハモウ。ニクイカタキヂヤワイノ。コレガナクハ。サリニハ又ワスレテヲルトキモアラウ物ヲ。コノ形見ガアルユヱ。見ニハ思ヒダシ〳〵シバシノマモワスレラレヌ

頭書古今和歌集遠鏡巻之十四終

流布のいせ物かたりにもほいにハあらでとありわが言れる要にハあらで物いふ故に本意にハあらぬ戯にみないへれと眞名伊勢物語にハ穂俗者と書り今もしかありけんを流布のいせ物かたりによりて後なほせしものか本意とてハこゝの詞にふさハず

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十五

戀歌五

五條のきさいの宮のにしのたいに住ける人にほ(カモ)いにハ(テハレテ、ハナヤウデ)あらでものいひわたりけるをむ月のとをかあまりになんほかへかくれにけるあり所ハきゝけれどこゝものもいはで又(アクルトシ)のとしの春梅の花ざかりに月のおもしろかりける夜(去年ノコチ)こぞをこひてかの西のたいにきて月のかたふ(ム)くまであばらな(アシヤウシモナイ所ノ)るいたゞきにふせてよめる

在原ノ業平ノ朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつハもとの身にして

○今夜コヽヘ來テ居テ見レバ。月ガモトノ去年ノ月デハナイカッア。月ハヤッハリ去年ノトホリノ月ヂヤ。春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハナイカサア。春ノケシキモ梅ノ花サ。タヤウスナドモ。ヤッハリモトノ去年ノトホリデ。ソウタイナンニモ。去年トチガウタフハナイニ。タヾオレガ身一ッバッカリハ。去年ノマヽノ身デアリナガラ。去年逢タ人ニアハレイデ。其ノ時トハ大キニチガウタフワイノ。サテモ〳〵去年ノ春ガ戀シイ。

二つのやはやはの意ありさて結句の下へもとのやうにもあらぬことかな。といふ意をふくめたり。怨ふくめたることは。月やはあらぬ春やはあらぬ。月も春も。もとのまゝあるにといへる。上ノ句にて聞えたり。すべてこの朝臣の歌は心あまりて詞たらずといふは。かゝるところなり。餘材打聞ともにわろしかの說ぞものでとくにては。してとゝぢめたる語のいきはひにかあはず。よく〳〵語のいきはひをあぢはひて心得べき歌ぞかし。

人と指ハ兄の時平公なり

川をわたるハ人に逢にたとへて云ふこと多くあり

題しらず　藤原ノなかひら朝臣

花すゝき我こそ下に思ひしがほに出て人にむすばれにけり

○内ゝ我コソ逢ウト思フテ其心デ居タニ。ソレデマア。我ガオモイレハムダフニナッテ。此ノ花薄ノ穗ニデタノヲ。結ンダヤウニ。オモテハレテ外ノ人ガトリクンデ逢テシマウタワイ。ハレ殘念ナフヤ花すゝきをむすぶと。伊勢家集此ノ歌のはしの詞に見えて。餘材抄に引り。

よるにのみ聞まし物を音羽川わたるとなしにみなれそめけん　藤原ノかねすけ朝臣

○タヾヨソニバカリ聞テ居ヤウデアッタモノヲ三アウデモナシニ。ナニシニ此ヤウニナレソメタフヤラ。ナマシゲニナレナシンデ。ソシテ逢

わがおもふ人の我ごと〳〵思はざる故によめるなるべし人とてハ大かたを云がごと〳〵にて思ふ人をふくめたり

人ハわれをよそに思ふさまにみゆるとなり

レヌノハ。サテ〳〵ツライモノヂヤ

凡河内みつね

わがごとく我をおもはん人もがなさてもやうきと世を心みん

○サテ〳〵ウイフヤ。オレハコレホド人ヲ深ウ思フニ。人ハトカクソレホドニ思フテクレヌ。オレガ思フトホリニオレヲ思フテクレル人ガアレカシ。ソレデモヤッハリ此ノヤウニウイモノカ。タメシテ見ヤウニ世は。男女の中をいふ世おり。○千秋云。世といへる詞の譯なきハ。一その譯のうちに。そのこゝろハあれバなるべし。

もとかた

ひさかたのあまつうらにも住なくに人ハようにぞ思ふべうなる

○天ニ住デ居ルワシデモナイニ。ドウシタフカ。人ハワシヲトホヨソニ思フヤウスニオモハルヽ

なさたる朝ハ朝和なりなくとハ和らぐ意にて波のたゝぬをも風の吹やむにも云フ心のうへにてなくさむと云も心のやわらぐるなり

見てもまた又も見まくのほしけれバなるヽを人ハいとふべうなり

○オレハ逢テモ〳〵ヤッハリ又々アヒタウ思フニ。人ハ段々ナレルノヲイヤガルヤウニ見エル。見まくのほしきにといふ意なり。古き歌にはこの格おほし。

さのとものり

雲もなくなきたるあさの我なれやいとはれてのみよをべへぬらん

○雲モナウテ風モナイデアル朝ノ空ハヨウ晴テアルモノヂヤガ。オレハソノヤウナモノヂヤヤラ。人ニイトヒキラハレテバッカリ。一生ヲタテル。カウタトヘテイフワケハ。甚晴ト被厭ト詞ガ同ジフヂヤニヨッテ歌ト云モノハ。アヂナフヨムモノヂヤナイカイノ

よみ人しらず

花がたみハ籠の目の花のごとく見たてゝ云なるべしかたばみといふも籠目なり

浮和布に厥目をにせ刈に假をよせていへり

花がたみめならぶ人のあまたあれゞ忘れぬらん數ならぬ身は

○日ホカニイクタリエヽヨイノガアルナレバ。ワシガヤウナ人カズデモナイ身ハワスレラレタデアラウ

うきめのみおひて流るゝ浦なれゞかりにのみこゝろあまへよるらめ

○ナニヽツケテモ。ウイフバッカリデ泣テクラスワシナレバ。思フ人ノタマ〳〵ニミエルノモ。タヾカリソメニ。口フサゲニ。チヨット立ヨラルヽバカリノフデコソアラウケレ。マコトノ恋ザシデ見エルトハ思ハレヌノ

あひにあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

いせ

鹽やきのきる藤ころもハをさのあてよみの少けれバその間遠なるによせて君が住里とわがやどゝその路のほどの間遠にしあれバにや君が來まさぬとなり

○此ノヤウニモノ思ヒヲシテ涙デ。袖ノヌレテアル時節ヂヤトテ。此ノ袖ヘウツヽタ月ノカホマデガ。ワシガ顔ト同ジヤウニヨウソロウテヌレテ見エルフワイノ。

あひにあひての說。餘材わろし打聞もとゞきをへず。すへてこの詞はこれと。かれとよくあひかあひて。同じやうなる意なり。

秋ならでおく白露ハねざめするわが手枕のまづくなりけり

よみ人しらず

露ハ秋ヨウオクモノヂヤガ。秋デナシニオク露ガアル。ソレハ。物思フテ夜半ニ目ヲサマシテ居ルワシガ枕カラ床ヘオチル涙ノ雫ヂヤワイ

すまのあまの鹽やき衣をさをあらみま遠にあれや君がきぬ〴〵

道ノアヒダカ遠イユエカシテ。マテドモ〳〵マダ御出ナサラヌ。アヽオ

ツイテヂヤ。上句ノ意餘材のごとし○千秋云。四の句の譯。まどほなる故にや。といふ意にとられたるなり。まことにこの歌。その意にあらざれば。よろしからず

山しろの淀のわかこもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき

セメテカリソメニチヨツトサヘ來テクレヌ人ヲ頼ミニ思フテ居ル。ソシハアヽラナノアカヌ心ヂヤ

あひ見ねば戀ごろまされみなせ川なに〳〵深めて思ひそめけん

ワシガ中ハ水ノナイト云水無瀬川ノヤウナモノデ。逢フガナケレバタヾ戀シイコトコソマサレ。水ノマサツテ深イヤウナコハナイ中ヂヤニ。ナニシニ末カケテ深ウワシハ思ヒソメタコヤラ

の鳴のはねがきもゝはがき君がこぬ夜は我ぞかずかく曉ニハ鴫ノハチガキト云テ。鴫ガキツウツゲウ羽ダヽキチスルモノヂヤガ君ガコヌ夜ハソノ鴫ノハチガキホドシゲウ。ワシガサイク度トナシ一タメ息ヲツイテナゲキマス。この歌の下ノ句の意。ときえたる人おし。歎かくとは。たとへの鴫の百羽がきの詞によりていへるのみにて。意はたゞ歎きするとのしげきよしなり。

玉かづら今はたゆとや吹風の音にも人のきこにざるらん

㊀モウハキレテシマウトテヤラ。此コロハイツカウ目ヲトヅレモセヌわが袖にまだき時雨のふりぬるハ君が心に秋やきぬらん

マダソノ時節デモナイニ此ノヤウニワシガ袖ヘ時雨ノフツタハ。君ガ心ニ秋ガキタカシラヌ。ソレデ此ノ袖ノヌレタハ涙ノシグレヂヤ

山の井のあさき心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらん

弦ハかるもの故に假にだにといハん序なり

鴫の羽かきとハ万葉に羽振鳴鴫といひたるにて心得べしハね打をあまたする鳥なり

玉かづらハ絶るといハんとてなり吹風も音といふ序なり

こハ人のわれにあたしからぬなり

ワシハ山ノ井ノヤウニ淺イ心デハナイニドウ云フデ君ハ。イツデモ。影バカリ見エテヨリツカシヤラヌフヤラ。ばかりのみとは。いたづらに重なれる詞にはあらずのみはいつとてもの意あり

わすれぐさたねとらましを逢とのいとかくかたき物と忘りせば

此ヤウニキツウ逢フノナリニクイモノヂヤト云フヲトウカラシツタナラ忘草ノタヂヲトツテオカウデアツタモノヲ。ソシタラソレヲ蒔テハヤシテ。コノ節戀ヲワスレルヤウニセウモノ

こふれどもあふ夜のなきハ忘草夢路にさへやおひ茂げるらん

ナンボ戀シフ思フテ寐テモ夢ニモ逢ウト見ル夜ノナイハ。カノ人ガワシヲ忘タワスレ草ガ。夢ノ道ヘマデハエシゲツタカシラヌ

夢にだにあふとかたくなり行ハわれやいをねぬ人やわ

この歌後撰にふたたび入たり

すゝ〳〵

夢ニサヘアハレヌヤウニナツテキタハ。ワシガモノ思ヒテエヲムラヌ故カマタハ君ガワシヲ忘レテ心ガカヨハヌノカ。餘材ねろし打聞よろし

けんげい法師

もろこしも夢に見しかゞ近かりきおもはぬ中そはるけかりける

唐ハキツウ遠イ所ヂヤト聞テ居ルニソレモ夢ニ見タレバ。近イフデアツタカトカク唐ヨリモドコヨリモ遠イハ思ハヌ中テヲコサルワイ

さだのゝぶる

ひとりのみながめふるやのつまなれゞ人をきのぶの草ぞ生ける

長雨ガフレバフルイ家ノ軒ハ。クサツテ。忍草ガハエシゲルヤウニ。タツヲヒトリ物思ヒノシンキナガメバツカリシテ月日ヲオクルワタ

登ハ仁明天皇の御子母ハ更衣三國氏なりはじめ源朝臣の姓をたまハりその後母の過失によりて族籍をけづられ出家して沙

彌源寂といへり貞觀八年遷俗の勅ありて貞の朝臣を給る事三代實錄に見えたり

拾遺の物名に忠岑が歌とす

シナレバ人ヲ戀シノブ忍ノ忍草ガ（しのぶ）ヤシゲウナルワイ

僧正遍昭

わがやどは道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

忍ッヨウテ來モセヌ人チクルカ〳〵ト待テ居タマニ。ツイ月日カタッテ。コナノ庭ハ。草ガアノヤウニシゲッテ道モナイホドニアレタワイ

今てんといひて別れしあじたより思ひくらしのねをのみぞなく

ナカイウチニ又來ウト云テ別レテインダ朝カラシテ。毎日ソノ人ノフバッカリ思ヒクラシニクラシテヒグラシノ鳴クヤウニ。オレヤ泣テバッカリヤ居ル

こめやとハ思ふものからひぐらしのなく夕暮ハたちまたれつゝ

ナンボ待ッタトテ來（て）ウカヤクルフデハナイトハ思ヒナガラモ。夕方（ゆふがた）ヒグラシノ鳴クシブンニナレバ門口（かどぐち）ヘ出テ立テ居テハモシモヤト待ッ心ガアッテ。ドウモ思ヒキッテハ居ラレヌ

今しハとわびにし物をさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

カウ久シウ來（て）ヌカラニハモウハト思フテ力（ちから）ヲオトシテ氣ヲクサラカシテ居タモノヲ。蛛ノ糸カキルモノヘカゝッテドウカ又頼（たの）ミノアルヤウニ思ハセル。コノ蛛ガ。蛛ノ糸ノキルモノヘカゝルノハ待ッ人ノクルシラセヂヤトヤラ云フヂヤニヨッテサ

今ハこじと思ふものからわすれつゝ待るゝとのまたもやまぬが

モウクルフハアルマイト思ヒナガラ。ソレヲウスレテハ又シテハ待ッ

今しのしハ助辭にて今ハといふなりわびにしといふにてほどへたる心ありさゝかにハ日本紀私記に云フ蜘蛛の別名也とあり又蛛の衣にかゝれバ思ふ人の來ると云諺あるによれりたのませるをつゞめたのむるといふなり

貫之集雨ふらんよりおもほゆるぬば玉の月にたにこぬ人のこゝろハ

万葉にはるかすみ棚引にけりいほりして秋田かるまて思ハしむとて

皆舟集に我せこがきまさめよひの秋風ハてぬ人よりもうらめしきかな

すみよしと詠ハわろし住吉とかきてもすみのえとよむなりいにしへすみよしといひしことなし吉をえとよむハ古昔なり後によしとよみあやまりしなり

鶴ハ松に多く住といひ久しきものなれハいひかけたり

忍ガマダマアヤマヌフカナサテモ〳〵

月夜にハこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

此ヤウニサヤカナ月夜ニハ來ヌ人ガモシヤ。來モセウカト待レテキガモメルイツソマツクラニ雲ツテ雨ガフルトモヌレバヨイニソシタラツライフザヤト思ヒ〳〵罪テシマハウニ

うゑていにし秋田かるまで見にこねばけさ初雁のねにぞ鳴ぬる

五月ノコロ此ノ田チウエテオイテ。インダ人ノ此ヤウニモウソノ田チ苅ルジセツニナルマデ。待ツテモ〳〵ワセヲバ。サテモ〳〵ナサケナイ人カナトオモハレテケサ始メテ雁ガナイタガソノ雁ノヤウニヲシモナイタ

こぬ人をまつ夕暮の秋風はいかにふけばかわびしかるらん

コヌ人ヲ待テ居ルコヌ方ノ秋風ハドノヤウニ吹クコトデコレホド悲イツライフザヤヤラ

久しくもなりにける哉住のえのまつハくるしき物にぞ有ける

ワシガ思フ人ノ來テ逢フタハイツノフデアツタヤラ。ソレカラ一向ニアハズニマア〳〵久シウナツタフカナ。來モセヌ人ヲ待ツノハサテサテクルシイ物デヤゴザルワイ

久しくといふ縁に。住のえの松といひその松を。人をまつにいひかけたるなり

住のえのまつほど久になりぬれどあしたつのねになかぬ日ハなし

かねみのおほきみ

わが宿ハみわのやま もとさびしくとゝふ らひ來ます杉たてる門

コヌ人ヲクルカ〳〵ト待テ居ル間ダガ久ウナツタレバ毎日ナカヌ日ト云ハナイ

なかひらの朝臣あひ志りて侍けるかれかたになりにけれべちゝがやまとのかみに侍けるもとへまかるとてよみてつかはしける

伊勢

みわの山いかに待みん年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

ワタシモモウ京ニ居テモオモシロウナイニヨツテ。此ノ度大和ヘマイリマスルガ三輪ノ山本トムライキマセト古歌ニヨンデアルヤウニ今カラアノ方デ戀シイ人ヲ待ツタトテモ何年タツトモ。タレモ尋ヲテ來テクレル人モアルマイト存ジマスレバ。ドウシテマア待ナナセテ逢レマセウノイ

上ハ序なり秋ハぎのうつり行が如く人の心も移り行かな

志ぐれにとあるハあやまりなり時雨とすべし

風に志たがふ木葉のごときわが心ならね

題志らず　雲林院のみこ

吹まよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人のこゝろの

アチコチトフキマヨウ野ノ風ガサムサニ萩ノ花ノナツテユクヤウニヨソヘウツヽテユクカマア。餘材わろし打聞よろし

今ハとて我身時雨にふりぬれべをのはさへにうつろひにけり　をのゝおまち

○ワシガフルウナツタレバモウイヤと思召テ。ヤヘカタオツシヤツタ御約束ノ御詞デデガナガウテ參ツタワイナ、時雨はふりといひ。又とのうつろふといはん料あり。○千秋云。この歌ハ二三一四五と。句をつゝけてこゝろうべし

人を思ふ心ならべこそ風のまに〳〵ちりも乱　小野さだき

バやすらハみだれしとなり

あま雲ハようといふ冠辭なり雲ハ遠くてのみ見ゆるものゆゑに冠にのみかきたるをかく下へかよハせてたとへとせるハいにしへになきとなり

れめ

○人ヲ思フ心ガ木ノ葉ナラバコソ風ノフクニシタガウテ。チリミダレモセウケレ。ワシガソナタヲ思フ心ハ。木ノ葉ノ風ニチリ亂レルヤウナカル〳〵シイ心デハナケレバ。何事ガアッタトテモ。ナンノメッタニカハラウゾイ

なりひらの朝臣きのありつねがむすめにすみけるをうらむるをありて志ばしのあひだひるハきてゆふさりハかへりのみしければよみてつかはしける

あま雲のようにも人のなり行ハさすがにめにハ見ゆる物から

○空ノ雲ハ目ニハ見エルケレモ遠イヨソノモノデヤガ。オマヘモチカゴロハテウドソレデ晝ハ御出カアッテ。サスガ目ニ見エハレナガラヨソ〳〵シウナッテマアチカラ夜ルオトマリナサッテ下サルコトハナイ。サテモ〳〵キコエマセヌナサレカタカナ

風ハやみハ風ハやゝしてなり

なりひらの朝臣

かへし

ゆきかへり空にのみしてふるとハ我ゐる山の風はやみなり

○ワシヲ雨雲ニタトヘラレタガナルホドヨイタトヘヂヤ。其雲ノヤウニワシガ。イタリキタリバッカリシテ足ヲトメズニタテルノハ其雲ノカヽッテ居ル山ノ風ガツヨサニ。トヾマッ居ルコトノナラヌヤウナモノデ。ワシガカヽッテ居ルソナタノ心ガミヅクサヽニドウモ夜ルハトマラレヌヂヤワイノ。ふるは。雨雲の縁ゐり

題しらず

かげのりのおほきみ

唐衣なれハ身にてうまつはれめかけてのみやハこひんと思ひし

ある説にうらに故らんとハ紅葉にそへて―いへる歌 あき風にちるものハこの葉なれバその間をするざれどそれと聞ゆるを バ後の歌のごとくきびしくハいにしへハいハざりけれバこの歌もうのこゝろにや

○キルモノハ着ナレヽバヤハラカニナッテ。身ニヒッタリトッキヤッハレル物ナレバソノ通リニ人モ。ナレタナラバ。身ニシタシウコソナラウハズナレソレニ馴テカラモヤッハリ。此ヤウニヨソ〳〵シウテ。ジヤウギウ心ニカケテ懇シウ思フテハッカリ居ヤウフトハ思ウタフカイナレナンテカラモヤッハリ此ヤウニアラウトハ思ハナンダ。かけては衣の縁あり

秋風ハ身を分てしもふるなくに人の心のうらになるらん

ともののり

秋風ハ雲ヤ霧ナドヲ吹分ルヤウ。人ノカラダヲ分ケテ。腹ノ内ヘ吹テハイルモノデモナイニ。ワシガ思フ人ノ腹ノ内ヲ心ガ。風ニ木ノ葉ノ空ヘナルヤウニ。ヨッヘウッヽタハドウ云フヤラ

上句の説。餘材打聞ともにわろし。かの説どもの如くにては。身を分てといふといたづらあり。

つれもなくなり行人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりけり

源宇干朝臣

次第ニツレナウナッテユク人ノ詞ガ。秋ヨリサキノ紅葉デヤワイナゼトイフニマヘカタ云テオイタフガ。サッパリカハッテシマヂタワ。木ノ葉ノ色ノヤウニ

こゝちろこなへりけるころあひ去りて侍のこはでこゝちおこたりて後とふらへりけれバよみてつかはしけける

兵衛

去での山ふもとを見てぞかへりにしつらき人よりまづ越じとて

サキダッテハワタシモワヅラヒマシテ。スデニ死マスデ。アッタガ。ッ

宇干集三の句とのハや末の句もみちなるらんとあり

兵衛ハ高經朝臣のむすめといへり

やけたる茅の葉とハ春野をやきたる時に燒のこりたるなり今ハおもひたゝすもゆるといふハ思ひのひに火をよせたり

六帖にハ末の句待べきものを

レナイオマヘヨリ先キヘワシハシデノ山ハコヘマイヅト存ジテ。ソノ麓マデ參ッテ見テャモドッテ參リマシタ

あひ志れりける人のやうやくかれかたになりけるあひだにやけたるちの葉にふみをさしてつかはせりける　こまちがあね

時過てかれ行をの〳〵淺茅にハ今ハ思ひぞ絶ず燃ける

秋モ過テ冬ガレニナッタ野ハ火ヲツケテモエル物ヂヤガ。テウドソノ通リデ年ガイテオマヘノ御心ノカレ〳〵ニナッタワタシハ今デハモウガヤウヂウムチノ思ヒガサモエマスワイナ。ソレデ此ノ淺茅モ此ノ通リニヤケマシタ。ゴロウジテ下サリマセ

ものおもひけるころ物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる　いせ

冬枯の野べとわが身を思ひせべもえても春を待ましも

うゝといひながるるといふみなを水の緑の詞なり

のを

人ニ見ステラレタワシガ身モ。冬枯ノアノ野。ヂヤト思フナラ。アヽシテ燒ヤウニ。今コソ思ヒガモエルケレドモ。ソレデモ又春ニナッタナラ芽ガデルデアラウト思フテ。春ヲ待タウモノヲ。ワシハモウアノ冬枯ノ野トハチガウテ。春ニナッタトテモ芽ノデル頼ミモナイ身ヂヤワイノ。從女シウモ。スサリヤウシテタモイノ

題志らず　とものり

水の泡の消てうき身といひながら流て猶も頼まるゝ哉

水ノ泡のキユルヤウニキエルホドウイ。我身ヂヤト思ヒナガラ。イッモカウバカリデモアルマイト。マタ末ヲ頼ミニ思フテ。ヤッパリマア消モセズニカウシテ居ルハサテ〳〵ラチノアカヌ我心カナ。千秋云。ながらへてを水の緑にてながれてといへり。

よみ人志らず

みなせ川有て行水なくハこうつひに我身をたゝぬと思はめ

水無瀬川ニ有ッテ流レル水ガナイナラバコソ。ワガ中ヲ。トチ〳〵切テシマウタト思ハウナレ。水ノナイト云フ名ノ水無瀬川サヘヤッパリ水ハアッテ流レルナレバ我中モ絶タヤウナレドヤッパリ縁ハアッテ。タエキリハセヌコモアラウワサテ。四の句わが中をといふべきを。身をといへるは少しいかゞあり。身をに。川の水脈をかねたるをや

みつね

よしの川よしや人こうつらからめはやく云てしとい忘れし

人ノツライハ□ニハテセヒガナイ。人コソツラカラウケレ。オレハマヘカタ云テオイタコハイッマデモワスレマイト思フ。はやくは。吉野川の縁あり。

花ぞめハつき草をもてうむるなり六帖にハ即チ月艸とあり

うたてハとさまなるこゝろなりうつろふハかハるなり

世の中の人といへと人ひとりを指すなり

よみ人しらず

世の中の人の心ハ花ぞめのうつろひやすき色にぞ有ける

世ノ中ノ人ノ心ト云フモノハチウド花染ノ色デ。カハリヤスイ物デッコザルワイ

心こううたてにくけれ染ざらべうつろふともをしからまじや

ウタテヤ。人ヲ思フコヲノ心ガ。ニクイヤッヂヤワイ。コヲカラ思ハズハ。サキノ心ノカハルモ惜カラウカイ。人ノ心ノカハルガツライモ。コヲカラ思フユエデヤワイ。色とは。いはざれども。三四の句は。色につきていへる詞あり。

こまち

色見江でうつろふものハ世の中の人の心の花にぞ有け

る

草ヤ木ノ花ハ。色ガアルユエニウツロウヂヤガ。色ハアルトモ見エズニウツリカハルモノハ。世ノ中ノ人ノハナ〳〵シイ心ノ花デゴザリマスワイ。色見えでは。色のおきをいふあり。餘村初二句の注わろし

よみ人しらず

我のみや世をうぐひすと鳴わびん人の心の花とちりなん

○花五ノチツテ。シマウタヨウニ同ツレソウ人ノ心ガカハツテノイテ。シマウタナラバ。ウイフヤ。ツライフヤト思フテ。相手ナシニワシヒトリ。鶯ノナクヤウニ泣テ居ルデアラウカ。世ハ男女の間をいふ。打聞下句を人の心の花とともにちりぬばとあるはわろし。花とは花のごとくにといはんが如し。鶯とのとゝおなじ○千秋云。なきわびんの譯に。泣て居ルテ。アラウカニあるハ。わびといふ詞の譯たらざるかとなれども。是ハ上にツライコトヤト思フテとあり。是にあたれり。此たぐひなほおほし心をつゝべし。

世をうきといふをうぐひすにかけてなくとハ云へり

ある人ハ女の歌と見えてあハれにやさしく侍る哉下の句ハ二人見たりし時をおもひいでゝよやまいづんとハいふなり

おもふともかれなん人をいかゞせんあかずちりぬる花とこそみつ

うせい法師

○イカホド殘念ニ思フタト云テモ。心ガカウツテ。トホノイテユク人ヲバナントセウゾ。トウモセウフガナイ。スレヤマダ見タヲメウナニ早ウ散タ花ヂヤト思フテ居ヤウマデ

今ハとて君がかれなば我宿の花をだにひとり見てや思はん

よみ人しらず

○モウコレギリト思ウテ。君ガトホノイテ來ヌヤウニ。ナツタナラコチノ庭ノ花ヂバ。ソレヒトリガ見テ。君ノフチイロ〳〵ト思ヒダスデアラウカ

むねゆきの朝臣

小町集にわすれ草わかみにつまんとおもひしハの心におふるなりけり

忘草かれもやするとつれもなき人の心に霜ハれかなむ

○人ノワレヲ忘レタ。ワスレ草モ枯テ。モシ又モトノヤウニ思フテクレルヿモアラウカト思ヘバ。ワシヲワスレタツレナイ人ノ心ヘ霜ガオケバヨイニト思ハレル。霜デハソウタイ草ガ枯レルモノナレバ。ソノツレヲワスレタ忘草ノカレルヤウニサ

寛平ノ御時御屏風に歌かゝせ給ひけるときける

うせいほうし

わすれ草何をかたねと思ひしハつれなき人の心なりけり

○ワスレ草ト云フ物ハ何ヲタネニシテ。ハエルコトカト思フタガ。ソノタネハツレナイ人ノ心ヂヤワイノ。ハテツレナイ心カラシテ人ヲバ忘レルモノヂヤワ。

題しらず

秋の田のいねてふともかけなくに何をうしとか人のかるらん

○曰ワシガキラウテモウイヲト云詞ヲカケタヿモナイニ。人ノ此ヤウニ遠ノイテ來ヌハ。何ヲウイト思フテノヿヤラ。かけ。かる。皆稻の縁の詞なり

初雁の鳴ころ渡れよの中の人のこゝろの秋しうければ

きのつらゆき

○人ノ心ノ秋ガウイユエニ。ワシハ空ヲワタル初雁ノヤウニ泣テヲタテルワイ

あはれともうしとも物を思ふときなどか涙のいとなかるらん

よみ人しらず

○物ヲアハレト思フ時モウイト思フ時モ。トカク涙ガホロ〳〵ホロ〳〵いとなきハいとまなきなるをいとなかると云にかけていへり後撰巻の池の玉藻にあそふにはゑのあしのいとなき戀もする哉

日くらしのこゑもいとなく聞ゆるハ秋くれがたになれるなりけり

六帖にハ別に題にいだせれバその世にハ人のきりたる物なるべし且歌に藻にすむ虫の名をわすれつゝとよめるハ貝などの一名てわれからハ破殺の邪とも思ハるなりいせものがたりにもわれから身をもくだきつる哉とよめり

ある注に桓武天皇の孫基世王の女なりといへり此王仁和五年正月任因幡守云々又ある説に因幡守藤原が女にて伊勢とよぶにおなじ

ホロ〳〵ホロ〳〵トコボレル。ナゼニ此ヤウニ涙ガイソガシウ。コボレルコヤラ

餘材打聞ともに。くだ〳〵しき注あり

身をうしとおもふにきえぬ物ならバかくてもへぬる世にこそ有けれ

○キツウ身ヲウイト思フニハ命モ消エサウニ思ハレルケレモ。ソレデモサスガニキエハセヌモノヂヤ。スレバ此ノヤウニウイ身デモ。ヤッパリソレナリニダッテユク世デッゴザルワイノ

典侍藤原ノ直子ノ朝臣

あまのかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をバ恨みし

○海士ノ刈ル藻ニ中ニワレカラト云虫ガ住デ居ルモノヂヤト云フヂヤガソノ虫ノ名ノトホリニ何事モワレカラヂヤ。我身カラノコトヂヤドレウケンシテコソ。泣ケナラ泣キモセウフナレ。ソレソウ人ヲバ恨ミマイゾヨウ思ヒマハシテ見レバ。人ヲウラミルノハ大キナフカクヂヤ千秋云。われからの事。已レつら〳〵思ふに。もしハ虫の名にはあらで。たゞ藻にすむ虫のごとく。はかなく敷にもあらぬ我身から。といへるにはあらじか。又海人といひて。我からといへる詞は。仁徳紀に。あまなれやおのがものからねなくとあるをも思ひて。よまれたるにやあらん。

あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひ出らずもとくるひも哉

いなば

○逢タイ人ニアハレヌノモ。其ノ人ノツライノモ。ミンナ我身カラノフヂヤスレヤ。ドレホド思フタトテ。アハレルフデハナイニ。此ノヤウニ下紐ノトケルハサテモ〳〵マア。ガテンノワルイ下紐カナ。下ひものとくるは。人にあふべきしるしなり。

寛平ノ御時きさいの宮の歌合の歌

すがの〻たゞおん

涙かハなみだかなり

六帖に三の句やみなましかバ

つれなきを今ハ戀しとおもへども心よわくもおつるなみだか

○ツレナイ人ヲ。モウ戀シウ思フマヒゾト。今ハタシナムケレドモ。ナンドソスルト思ヒタシテ。涙ガコボレル。サテモ〳〵マア心ヨワイコトカナ

伊勢

題しらず

人しれずたゆなましかバわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

○シヒウ世間ヘシレズニ絶タ中デアラウナラ。絶ルハツライコトナガラモ無イコトヂヤト云テ。セメテハウキ名ノタヽヌヤウニナリにセウモノヲワシガ中ハ。ハヤ世間ノ人モ知テ居レバ。無イコトヂヤトモイハレヲバ絶ダバカリカ。ウキ名サヘ立ッテサテモ〳〵メイワクナツライコトカナ

○千秋云。すべてましものをとゞめる歌ハ。此譯のごとく多く意をふくめたるものなり心をつゝべし

よみ人しらず

見きとないひろハ見けりとないひそなりきかゝハきゝをのべたる詞なり

もハちハ軍の字の義なり

これをだに思ふとてて我やどを見きとないひろ人のきかたに

○人ヲ深ウ戀フトキニハ其ノ人ノ家ナリトにに見タイヤウニ思ノモノヂヤガサウツチ〳〵思フテ居ルコトヲヒヨットシタ詞ノハシニモ。ワシガ所。見タト云コトモ。人ノ聞クトコロデ必ズ云テハナイヂヤ。エテハソンナコカラシレルモノヂヤ。この歌ハ。こゝに入べき歌にあらず。しかるを餘材は。部立にあづみて。歌の意にたがへり。この集おらんからにはれゝゝゝるとか部立のあやまりもおからん。

あふとのもはら絶ぬる時にこそ人の戀しきことも知りけれ

○自由ニアハレル時ニハ。戀シイト云ハドノヤウナモノヤラシラナンダニ。今カラスキト絶テアハレヌ時節ニナッテハジメテ人ノ戀シイコトモ知ッタワイ

わびはつる時さへ物のかなしきハ　いづこを忍ぶ涙なるらん

○此ノヤウニ戀ニアグミハテタ時節ニサヘ。アノ人ヲヤッハリイトシイ。戀シイト思ウテ涙ノコボレルハ。ドコガ戀シウテノヤラ。此ノヤウニウイツライメニアハスル人ナレバ。イトシイフモナイハズヂヤニ此かなしきハいとほしく思ふ意で。さて三の句と。しのぶ涙といへる詞とをたがひに相まして心得べし。打聞に。忍びにあまだのおつらんとあるハ。たがへり。

藤原おきかぜ

恨みてもなきてもいはんかたぞなき鏡にみゆる影ならずして

○ウランデモ泣テモ。此カナシサヲバ誰ヲ相手ニシテ。イハウヅ(言ハ)モハヤ絶テ一向ニアウヿモナケレバ。鏡ヘウツルオレガ影デナウテハ外ニ相手ニシテ。云ウヤウハナイ

よみ人しらず

夕されば人なきどこを打はらひ嘆かんためとなれるわが身か

○ユウガタニナレバ。君ガキテ寐モセヌ床ヲハラウテ。獨リヲルトテハ。イツノ夜デモ〳〵。ツライヿヤト思フテ。タメイキヲツイテ寐ルヂヤガワシハマア此ヤウニツライ歎キヲセウタメニ。生レテ。キタ身カヤ。サテモ〳〵イングワナ身カナ

わたつみの我身こす波立かへりあまのすむてふうら見つるかな

○サツハリ絶テシマウタ中ヂヤノニ。ソノ人ノ心ノカハッタヿヲ。又ヒッカヘシテ。此ヤウニ恨メシウ思フヿワイノ。今サテ恨ンダトテ。ナンノセンガアラウヅサテモソチナワシガ心ガナ

此歌後撰には男の忘れ侍りけれバ伊勢が歌とせりかつ我の集にも見ゆ

影にあらずしてと云のこして人はたらはてみれバといふとを志らせたり

万葉にあすよりはわが玉床をかはらひ君とはねすてひとりねんかも

小田はたび〳〵すきかへし作るなりはしめにすゝをバあらずきさてあら〳〵とすゝなり

後撰にときにはとたのめしとはまつほとの久しかるべき名にこそありけれ

あら小田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこうやまめ

○アラ田ヲ何ンベンモ〳〵スキカヘスヤウニマア何ンベンモ人ノ心ヲトツクリトヨウカンガヘテ見テコソ。モウラチガアカヌト云フハ定メウフナシ

ありそ海の濱の眞砂と頼めしハ忘るゝとの數にぞ有ける

○濱ノ眞砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。我戀ハヨンデモ〳〵ツキマイナド、ギヤウサン二云ッテ。ワシチヨロコバシテオイテ。アノ濱ノマサゴノ數バ。ミヅクサイフノケシカラヌタトヘデサ。アッタワイ

あしべより雲ゐをさしてゆく雁のいやとほざかる我身悲しも

○芦原カラ空ヲサシテヅ、トトンデユク雁ノダン〳〵ト遠ウナルヤウニダン〳〵ト思フ人ノトホノイテユクワシガ身ハマア。カナシイコトデヤ

ある説に秋風を人のあくにそへたり

むなしくは死をいふにあらず我身かひなくといはんが如くそ

ちぐれつゝもみづるよりも言のはの心の秋にあふぞわびしき

○時雨ガフリ〳〵シテ木葉ノ色ノカハッテユク秋ノコロハッテイモノヂヤガソレヨリハ。云テオイタ詞ノカハル。人ノ心ノ秋ニヤウ身ガナホッライ

秋風のふきと吹ぬるむさし野ハなべて草葉の色かはりけり

○秋風ガフキサヘスレバ。アノ廣イ武藏野デモ。野ハサッパリミナ草ノ色ガカワッテ枯ルワイ。人ノ心モソノトホリサ。餘材くだくだし

小町

秋風にあふたのみころかなしけれ我身むなしくなりぬ

れは田の子のなきよりむなしくといひたのめしとのわが身にむなしくなりたるさなり

よろづの草の中に眞葛はとに風にうらがへるとのなりよてくすの葉のかへるさもうら見ともよむなり

と思へば

○秋ノ大風ニアフ稲ハナ。キノドクナモノヂヤ。百姓ノ頼ミニシテ居ル田ガサツハリシマヒニナルワシガ中モテウドソンナモノデ。人ノ秋風ガフイテ頼ミニ思フタコトガ。皆ムダニナツタト思ヘバナ。カナシイワイノたのみは。田の實によせたり。さて四の句。わが身むなしくと。つゞきてハ心得べからず。我身ハ秋風にあふといふへかりむなしくハたのみへかゝれり。

たのらのさだぶん

秋風のふきうらがへすくずの葉の恨みてもなほうらめしき哉

○上ウラミヲ云テモ〳〵。マダヤツパリ恨ガハレヌ。サテモ〳〵ウラメシイフカナ

よみ人しらず

宇治橋の中絶たるとは古紀によんところなし

秋といへばようにそ聞しあだ人の我をふるせる名にこそ有けれ

○秋ト云フチバヨツノフノヤウニナ思フテ居タカ。ヨツノフデハナイ。ウツリギナ人ノウシナ見捨タノガ。ウシナアキト云モノデ。ソノ名デサゴザルワイノ

わすらるゝ身をうぢ橋の中絶て人もかよはぬとしぞへにける

○テウド橋ノ中ガキレテアレバ渡ル人モナイヤウニ。思フ人ニ忘レラレタ身ハウイモノデ。何ン年カモウチカラ。使モコヌワイ。千秋云。四の句人見れはやすくきこゆ。又ハこあたかあたにへもかよはす

坂上これのり

あふとをながらの橋のながらへてこひわたるまに年ぞへにける

ならんといふ詞万葉に秋の田の此ほむけのよれる片よりに君によりなくこちたかりとも此よりなはよらを延たる詞なり今のなりならんも成なんといふなり

○逢コモナイニ。ヤッパリアヒカハラズ。戀シダウテ月日ヲオクルウチニサハヤ何ン年カタツタワイ。又ハアヒタイ〳〵ト思フテ戀シダウテ月日ヲオクルウチニサ。千秋云後の歌の意なれバ。あふとを戀わたるとつゞきて。あふとなくといひかけたるには。あらず。をもじによれバ さやうにも聞ゆ志かれども。逢となしといひかけたるやうにも聞ゆるなり。

うきながらけぬる涙とともなりならん流れてとたに頼ま、れぬ身は

○世メテハ又末デナリモト思フ頼ミサヘナイワシガヤウナウイ身ハ。イツソノコ水ニウキニナガラ。消ル涙ノヤウニキエテシマイナリにスレバヨイ。千秋云。うきながらハ。平又きまゝにての意にかねたるなるべし。

流てハいもせのやまの中におつるよし野の川のよしや世の中

よみ人志らず

○紀ノ國ノ妹山トセ山トノ間ダサヘ。吉野川ガ流レテ。來テ中ノヘダテガアルカラハ。ソウタイ人間ノ男女ノ中モ。イツマデモ始メノヤウニムツマシウハナイハズノコデ。久シウナレバオノヅカラカレニレガ出來テクルノモ。ソノハズツコヂヤ。ハテゼヒガナイ山デサヘサウヂヤモノ。世の中は。男女の中をいへるあり。すべて男女のあからひを世ともいへると多し心得おくべし。

頭書 古今和歌集遠鏡卷之十五終

あいじやうのうたこゝの詞にハかなしびうたとゝなふべし

拾遺にみつせ川わたるみさをもなかりけり何にころもをぬきてかくらん

頭書 古今和歌集遠鏡卷第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりける時よめる　小野たかむらの朝臣

なく涙(濁がゝ)あめとふらなん渡(わた)り河水まさりなゞゝへりくる

○雨ガフッタナラ三途(さんづ)川ノ水ガマスデアラウ。ソシタラ。妹ガヨウ渡ラズニ又此ノ世ヘモドッテクルコモアラウソノタメニ。此ノオレガ泣涙(なみだ)ガ。ドウヤ雨(あめ)ノトホリニフレバヨイ

さきのおほきおほいまうちぎみを白川のあたりに送葬(そう)しけるよめる　そせい法師

ほりかハのおほきおほいまうち君は關白太政大臣基經卿なり

うつせみとハいにしへの詞にハ現身の事にてうつしみうつそみなどもいひて蟬のからのとにいひしハなしやゝ後比よりもぬけがらのとにいへり

ちの涙（濁句）おちてぞたぎつ（濁句）まら川ハ君がよまでの名にこそ有けれ

○此川ノ名ヲ白川ト云。此度オカクレナサレタ良房公（四）樣ノ御在世ギリノ（まで）ナ名デアッタワイ。此ノ殿ノ御カクレナサレタレバ。悲シサニ拙僧ガ泣ク。此ノ眞赤（まっか）イナ血（一）ノ涙ガサッサト（二）流レル。スレヤモウ白川デハナイ赤川ヂヤ

ほりかハのおほきおほいまうち君身（み）まかりにける時にふかくさの山よをさめてける後（清）よよみける

僧都勝延

うつ蟬ハからを見つゝなぐさめつ深草の山けふりだにたて

○蟬ハカラヲヌキステヽオイテ。ドコヘカインデシマウモノヂヤガ。ソレモソノヌケガラハ。イツマデモ殘ッテアルニ。人ハ死ヌルトソノマヽヌケガラサヘ燒テシマウテ。跡ヘ殘シテハオカヌモノデ。此ノ基經公樣モ御尊骸サヘノコラヌハ。サテ〳〵オノコリオホイコトヂヤ。セメテソノ御火葬ノ烟ナリニ殘ッテアレ。此ノ深草ノ山ヨ。ソシタラ。ソレヲ見テナリニ。御尊骸ノナゴリヂヤト思フテ。少シハカナシサヲハラサウニ。あぐさめつといふと。蟬の方にいひたれども。意ハ蟬にハかゝらず。蟬にはからを見てあぐさむる事よしあし。この詞ハ烟だにたてて。それを見てあぐさめんといふ意あるを。上にいひて。下へひゞかせたるものあり。古歌にはかゝるとおほし。さる例をしらでハまどふとあり。心得かくべし。

深草の野べの櫻しこゝろあらばことしばかりは墨染にさけ

かむつけのみねを

公の薨じ給ふハ正月なれども詞書に深草山に納てける後ニとあれバ二月の末などに花のさきたるを見てよめるなるべし

拾芥抄に延喜七年卒すと見えたり
後撰に敏行の逢坂のゆふがけに鳴鳥のとよめるハ此度のときや
今の本に寐でも見てけりとあれど頼昭本ならびに六帖にも見えけりとあるをよしとす

○此ノ度基經公ヲヲサメマシタ此ノ深草ノ野ノ櫻ガマアルナラ。今年ハカリハ墨染ノ色ニサケサ。人モミナ墨染ノ服ヲキテ居春ヂヤニ

藤原ノ敏行ノ朝臣の身まかりける時によみてかの家につかはしける

きのとものり

ねても見ゆねでも見にけり大かたハ空蟬のよぞ夢まハありける

○此ノ度ノソコモトノ御不幸ニツイテ。ヨウ思フテ見マスレバ夢ト云モノハヲムツテ居テモ見ルモノナリ。又寐イデモ見ルモノデゴザルワイ。此ノ人間ノ世ガヲ。ソウタイミナ夢デゴザルワイスレヤ。寐デモ見ルヂヤウヲ。アヽ敏行殿ノ御事マコトニ夢ノヤウニ存ジマス

あひ知れりける人のみまかりにけれバよめる

きのつらゆき

今の本に世の中にとあるハわろし六帖に世の中をとあるをよしとすこの歌拾遺にふたゝび入られたり

この歌家集にハ相知りたる人のすまひの使に遣き國へくたるにとありて事たがへり

夢とこういふべかりけれ世の中にうつゝある物と思ひける哉

○世ノ中ヲバソウタイ皆夢トヲ。云ハウフヂヤワイ。ソレニ今マデハ。正眞ノコトガアルモノヂヤト思フテ居タハ。サテモアハウナフカナ

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる

みぶのたゞみね

ぬるがうちに見るも現とハ見ずを夢といはんはかなき世を

○ヲヲムツテ居ルウチニ見ル夢バカリヲ。夢ト云ウフカイ。ソレバカリデハナイソウタイ此ノ無常ナヨノ中モ正眞ノコトハ思ハヌ。ミナ夢ヂヤ

あねのみまかりにける時よめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別れをとむる涙がらみぞなき

万葉の長歌に行水のかへりめごとく吹風の見えぬがごとくあともなきよの人にて（下巻）

○川ノ瀬ナシガラミテセキトメレバ。流レテユク水デモ淵ニナッテトマルモノデヤワイ。ソレニ死ンデユク人ヲセキトメルシガラミハナイ

藤原たゞふさが昔あひ志りて侍ける人のみまりにけるる時にとぶらひにつかはすとてよめる　閑院

さきだゝぬくいのやち度かなしきは流るゝ水のゝへりこぬなり

○人ノ死ヌレバテウド流レテユク川ノ水ノトホリデ。二ダビ返ッテクルト云ッテハナイ。此ノ度ノ御事サヅヤ御力ヲ落シ御推量申シマシタ。ワクシモ御同前ニカヲ落シマシタ。サキヘ早ウ死ニマシタラヨカッタニカウシテ生テヰリマスノガ悔シウテ。クリカヘシ〳〵カナシイハ此ノ度ノ御事デゴザリマス。サキヘ死ニマシタナラ。コンナコトハウケタマハルマイモノ。餘材打聞ともにたしかあらず。三の句のはもじと。結句のおりとを。相照して味ふべし。さて二の句。くいのとゑばら〳〵切て。八千度かおしきいとつゞけて讀べし。八千度は。かあしきへかゝれり。悔にかゝれる詞にはあらず

家集六帖等にハ二の句命なれどもとありて末の句家集にあハれなりけれとあり

紀ノ友利が身まかりにける時によめる　つらゆき

あすさらぬ我身と思へどくれぬまのけふハ人こうかなしかりけれ

○我身も明日ハシレヌトハ思ヘドマダ暮テ。明日ニナラヌ今日ノウチハ。マアオレハカウシテ殘ッテ居レバ。人ノ死マダノガ悲シイワイ

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しき物を

○時節モアラウニ秋ノ時分ニ人ノ死ナウ〻カヤ。秋ハモノカナシイ時節時しものしもハ必しもなどの例にて助語なり

ナレバ生テアルヲ見テサヘナツカシウ思レルニマア

は丶が思ひにてよめる　凡河内みつね

かみな月しぐれにぬる丶もみぢ葉はたゞわび人の袂なりけり

父母の喪ハおもひといへり

○此ノ十月ノ時雨ニヌレタ紅葉ヲ見レバ。トント悲シイ丁ノアル者ノ袖ヂヤワイ。今度ハ樣ニハナレテカナシサニ。血ノ涙ヲ流シテヌレル我ガ袖トアノ紅葉ト。色モヌレタヤウスモ。トツトオンナジ丁ヂヤ

ち丶がおもひにてよめる　たゞみね

藤衣はつる丶糸はわび人の涙のたまのをとぞなりける

藤衣ハ喪服をいふ端をぬハぬもの故日來ある中に糸のはつるゝなり

○ワシガ今ノ服テ着テ居ルキルモ〳〵ハツレテ來ル糸ハ。涙ノ玉ヲツナグ緒ニナナルワイ。涙ノテウド玉ノヤウニコボレルガハツレタ糸ヘカヽルハ。玉ヲ緒ヘツナグヤウニ見エテ

おもひに侍りけるとしの秋山でらへまかりける

道よてよめる　つらゆき

朝露のおくての山田かりそめようきよの中をおもひぬるかな

打聞つるかなに作れりつる哉とハ過しとなれバなりさて朝露のおゝくとつゞけ山田をかるゝと云ふ序ながらも道のゆくてのけしきをもてよめり

○コヽ今デハ。世ノ中ノウイモノヂヤト云フチ。タヾウカ〳〵トカリソメニ思フテ居タコカナ。今度不幸ニアウテ世ノ中ノウイコトヲ眞實ニ思ヒシツタ

おもひに侍りける人をとふらひにまかりてよめる　たゞみね

墨染の君がたもとハ雲なれやたえず涙の雨とのみふる

墨ぞめのたもとハ藤衣なり

○貴樣ノキテゴザル服ノソノ袖ハ雲ヂヤカシテ。涙ガタエズヒタモノ雨ノヤウニフリマス妻の親の忌中で此よみ人がめのおやのおもひにて山寺に侍けるをある人のとぶらひつかはせりけれバ返りごとによめる

諒闇日本紀にみものおもひとよめり嘉祥三年三月廿一日に仁明天皇崩御なり

あし引の山べに今ハすみぞめの衣のそでのひる時もなし　よみ人しらず

○私モモウハヤ只今ハ御聞及ビノ通リ山ニ住ハヨメマシテ。泣テバッカリヲリマスレバ服ノ袖ノカハキマスヒマモゴザリマセヌ

諒闇のとし池のほとりの花を見てよめる　たかむらの朝臣

水の面よ志づく花の色さやりにも君ゞみかげのおもほゆる哉

○アノ池ノ水ヘウッヽタ花ノ影ノハッキリト見エルヤウニ崩御ナッタ君ノ御顔ガアリ〳〵トマアオガムヤウニ思ハルヽコカナ

しづくゝ。物の水の中に見ゆるとあり。万葉に多し。その歌どもを考へて知るべし。然るをあるひゝ沈浮ありといひ。或ゝ沈〻ありといふゝ。

仁明天皇なり

藏人頭ハ殿上を管領して宮中にてゐいハ

みあひがとあり。万葉にまれに。沈とかけるところのあるは借りてかける字あり。たゞ沈〻とをしづ〳〵といへるとあし。

深草のみかどの御國忌の日よめる　文屋やすひで

草ふかき霞のたに〻影かくしてる日のくれしけふにやハあらぬ

○サイチウト照ル日中ノ日ガ深イ霞ニカクレテニハカニ闇ウナッタヤウニ先帝樣ハマダサカリノ御年デ俄ニ崩御ナッテ草ノフカイ深草山ノ谷ヘチサメ葬ッタガホドナク御一周忌ニナッテ今日ハソノ去年ノ御崩御ノ日デハナイカイマアアヽソノ時ハ悲シイマデアッタガ。去年ノケフデアッタト思ヘバ又ソノ時ノヤウニ思ハレテ。サテモ〳〵カナシイコヂヤ

深草のみかどの御時に藏人の頭にてよるひるなれ

んかたなき官なり枕の草子にめでたき物の中に蔵人を云へり

こけの袂ハ苔衣の衣なり隠者の服なり

拾芥抄云 河原院ノ六條坊門南万里小路東八町云々

つかうまつりけるを諒闇になりにければさらに世にもまじらずじてひえの山にのぼりてかしらおろしてけりうのまたのとしみな人御ぶくぬぎてあるハかうぶりたまはりなどよろこびけるを聞てよめる

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ

○世間ノ人ハミナ此ノ節ハモハヤ御服ヲヌイデ花ヤカナ衣ニナツタギヤガ。我ハソンナ花ノ衣ドコロデハナイ。マダ今ニ涙ヲコボシテ泣テバツカリ居レバ。セメテハ此ノ涙ニヌレタ苔ノ衣ノ袖ガ。カワキナリにせイヤ。人ハミナ花ノ衣ニサヘナツタギヤニ

河原のおほいまうち君のみまかりて秋かの家のあたりをまかりけるに紅葉の色まだ深くもあらざりけるを見てかの家によみていれたりける

近院ノ右のおほいまうちぎみ

打つけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなき宿は色なりけり

○亭主ガナクナラレタレバ。庭ノ紅葉サヘホツコリトシタ色ガナイワイソレユエコノ。紅葉ヲ見タレバニハカニマアドウヤラ。此ノ屋敷ガサビシウ思ハルヽナカナ

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又のとしの夏ほとゝぎすの鳴けるをきゝてよめる

つらゆき

時鳥けさなく聲におどろけバ君にわかれしときぞありける

○ケサ郭公ノナク聲ニビックリ。シテ目ガサメテ思フテ見レバ。アヽモウ

打つけにハ打ハ詞にてつけバうのとにつきてなり俗にうのまゝすゞなどといふほどの事なり

あるか有かなの略なり

題詠に
朝がほを何はかなしと思ふらん人をも花ハさこそ見るらめ

時鳥ガナケバ。去年君ニハナレタ時節デオザヤルワイ

櫻をうゑてありけるにやうやく花さきぬべき時にかのうゑける人身まかりにければその花を見てよめる　きのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきに戀むとか見し

○櫻花ハキツウ早ウチツテハカナイ物ザヤガ。ソレヨリサキヘウエタ人ガ、ハカナウナツタワイ。アヽ無常ナ世ノ中ザヤ。花ト人トドチラガサキヘアダニナツテ戀シウアラウト思フタヅ。此ノヤウニ花ヨリサキヘウエタ人ガアダニナツテ。戀シカラウトハサラ〳〵夢ニモ思ハナンダコトザヤ

あるじみまかりにける人の家の梅花を見てよめる

色のこさとハこれも紅梅なるべし

菅家文學に大臣薨じ給へりし又の年河原院ハやけたるよし見えたり

心さびしきに浦さびしをよせたり

色もかもむかしのこさにゝほへども植けん人の影ぞ戀しき

つらゆき

○此ノ梅ノ花ヲ見レバ。色モ香モマヘカタノ濃サニカハラズ同ジヤウニ。咲テ見ゴナケレモ。今年ハウエタ亭主ガ居ラレヌユエ。此ノ花ヲ見ルニツケテモ。ウエテヒサウシラレタ亭主ノ面影ガ戀シイ

河原の左のおほいまち君のみまかりて後かの家まをつくれりけるを見てよめる

君まさでけふり絶にし塩がまのうらさびしくも見ゆわたるかな

○君ノゴザナサレヌデ。鹽モヤカヂバ。烟ノタエテシマウタ此ノシホガマノ浦ハカウ見ワタシタトコロガマア。物カナシウサビシウ見エルワカ

父のありけんハ友則の父の世に侍りけん

ナ

ふぢはらのとじもとの朝臣の右近中將にてすみ侍けるざうしの身まかりて後人もすまずになりにけるに秋の夜ふけて物よりまうできけるついでに見いれければもとありしせんざいいとおもしくあれたりけるを見てはやくそこに侍けれハむ。ゝーをおもひやりてよみける

みはるのありすけ

君がうゑし人むらすゝき虫の音のおもげきのべとも成にける哉

○君ノウエテオカセラレタ。タツタマムラノ薄ガ。シゲウナツテ。虫ノシゲウナノ野ニマアナツタワイ。サテ〳〵ケシカラヌアレヤウカナ

これたかのみこのちゝの侍りけん時によめりけ

時なりある抄に友則が父ハありつねなりといへりものゝ見えたる事にや有常ハ惟高の皇子のをちにてまたしく參りたる人なれバさもあるべゝおぼゆ

いせの集にまでの山こえてやきつるほとゝぎすこひしき人のうへかたらなん

十六

ん歌どもをとこひけれバかきてをくりけるをくにとものり

よみてかけりける

ことならべ言の葉さへもきえならん見れば涙のたきまさりけり

清

○我父ハトテモ死ナルヽナラバ。ヨンデオカレタ歌マデモ。ミナイツシヨニイツソ消テシマヘバヨイニ。ナマナカニ此ノ歌ガ殘ツテアツテ。跡デ見レバ。一シホ思ヒダサレテ。イヨ〳〵カナシサガマスワイ

題しらず　よみ人しらず

なき人のやどにかよハゞ時鳥かけてねにのみなくとつげなん

○時鳥ハ死ンダ人ノ居ル所ヘカヨウ鳥ヂヤト云フヂヤガ。イヨ〳〵サウナラバコリヤ。時鳥ヨオレガ。シヤウヂウ思フテ泣テバッカリ居ルト云フフチ。アチヘシラシテクレカシ。又かけてはハイヒダシテ

たれみよと花さけるらん白雲のたつ野とはやくなりに
しものを

○此ノ家ノ此花ハ。タレニ見ヨトテ咲タヿヤラ。亭主ハ死ナレテ。此ノ庭ハモハヤ今デハ里遠イ野ノヤウニナツテシマウタ物ヲ。花ガ咲タトテタレガ見ヤウゾ。打聞に。三四の句を火葬のけぶりによせたりとあるは。わろし。

式部卿のみこにずみわたりけるを
いくばくもあらで女みこのみまかりにける時に
かのみこのすみける帳のかたびらのひもにふみ
をゆひつけたりけるをとりて見れば むかしの手
にてこの歌をなんかきつけたりける
かず〳〵に我をわすれぬものならば山の霞をあハれと
ハみよ

式部卿のみこハある人云式部卿皇子ハ二品貞保親王なり字多天皇の皇子なり世に玉光ノ宮と申す好色無雙の美男にてましませしとなり

○御深切ニ思召テワタシガ御忘レ下サレヌモノナラバ。山ヘタチマヌ。霞ナアハレトハ思召テゴラウジテ下サリマセ。山ノ霞ガワタシガ烟ニナリマシタ跡ノユカリデ。ゴザリマスルホドニ。打聞かず〳〵にの注わろし。

をとこの人の國にまかりけるに女にはかよやま
ひをしていと よわくなりにける時にみおきて身
まかりにける よみ人しらず
こゑをだに聞でわかるゝたまよりもなき床にねん君ぞ
悲しき

小町集に
ハかなくて雲となり
ぬるものならバかす
まんうらをあハれと
ハ見よ

六帖に三の句われよ
りハとあり

○追付京ヘ御カヘリナサツタラワタシハモウ今度死ンデシマウテ居モセヌ床ヘオヒリサビシウ御寢ナルデアラウト存ジマスレバチマヘノ御聲ナサヘエキカズニワカレテ死ニマスルアタシガ魄ヨリモ。オマヘガワシヤオイトシイ

病ハうのなやむとを体にいひわづらふハ何事にもわづらしきとに云て身のいたみをわぶるに云ヶ

拾遺集にやまひして人多くなくなりし年なき人を野らやぶなどにおき侍るを見てすけきに

みな人の命を露にたとふるハ草むらごとにおけばなりけり

やまひにわつらひ侍ける秋こゝちのだのもしけなくおほへけれべよみて人のもとにつかはしける

大江千里

もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなき物ハ命なりけり

○紅葉ヲ風ノフクナリニシテオイテ見ルヨリモマダハカナイ。物ハウシガ命デゴザルワイ。モウ〳〵カウヤス今モシレマセヌ

みまりなんとてよめる

藤原これもと

露をなどあだなる物と思ひけんわが身も草におかぬばかりを

○ヒゴロ露ヲハカナイ物ヂヤトバ。ナゼ思フタコヤラ。ハカナイノハ露バカリデハナイ。サウ思フタオレガ身モ。露ノヤウニ。草葉ニオカヌトイヒ云バカリデコソアレ。今消ウモシレヂバ。露トナンニモカハルコトハナ

やまひしてよわくなりにければ

なりひらの朝臣

つひにゆく道とハかねて聞しかど昨日けふとハおもはざりしを

○死ンデユク道ハタレデモイツヂハセヒニユク道ヂヤト云コトハ。カネ〳〵聞テ居テ。ヨウガテンシテ居タケレドモ。ソレデモ此ヤウニモウ今日カ明日ユカウコトハ思ハナンダニ。ハヤ時節ガキタッテ死ナヂバナラヌコトカヤ千秋云。この歌。儒佛などのさとりがましき意にへつらハずして。おもふ心のありのまゝに。よみ出られたるもの。いとも〳〵あはれふかく。たふときを味ふべし。これぞ皇國のいにしへの意にて。人の底こゝろなりける

かひの國にあひ志りて侍ける人とぶらはんとて

かねてハ環象等の字を万葉に書たり

元慶四年五月廿八日年五十六にて卒すと三代實錄に見えたり